

談話の観点から見る動詞時制のメカニズム

— Reflections on the mechanism of verbal tenses from discourse perspective —

東 郷 雄 二

1. はじめに：時制を「談話の観点から見る」とはどういうことか

(1) 伝統文法の時制論

伝統文法においては、ひとつひとつの時制の意味価値をばらばらに記述し、過去時制の「〇〇用法」などと分類するのがふつうであった。

【実例】C. T. アニアンズ『高等英文法 — 統語論』文建書房、1951.

◇現在時制の用法

1. ある動作を現在進行中のものとして、またはある状態を現在存在しているものとして表す。

Here he *comes*.

It now *draws* towards night.

The war *continues* in all its horror.

現在進行中の動作は、しかしながら、現在継続時制によって表されることが非常に多い。

2. ある動作を現在において習慣的に繰り返されるものとして表す。

He *gets up* every day at six o'clock.

3. あらゆる時代を通じて真実であることを示す。

Fortune *favors* the brave.

4. 過去の事件をいきいきと描写するとき過去時制の代わりに（史的現在 historical present）

News *is* brought of the disaster ; the king *does not dare* to appear....

5. 未来時制の代用（主として運動の動詞とともに）

We all *start* in the morning for Paris.

◇過去時制の用法

1. ある動作を過去に起こったものとして述べる。

William the Conqueror *landed* in A. D. 1066.

2. ある動作を過去に進行中のものとして、またはある状態を過去に存在しているものとして記述する（同時過去 contemporaneous past）。

The town *was* in an uproar: men *shouted*, women *wept*, dogs *barked*.

3. ある動作を過去に習慣的に繰り返されるものとして記述する（習慣的過去）

I *rose* every day at six.

(2) 伝統文法の時制論には次のような点が欠けている

(A) 時制の全体像が示されていない

前置詞などと同様に、時制は数が限られ、これ以上増えたり減ったりしない「閉じた集

合」(closed set) である。Saussure が示したように「構造」(structure) とはそれを構成する要素が緊密に関係しながら全体 (whole) を形作っているものである。ならば時制が全体としてどのように構造化され機能しているかを論じなくてはならない。

例外は Reichenbach, Hans, *Elements of Symbolic Logic*, The Macmillan, 1947. で、Reichenbach は現在時 (S)、出来事時 (E)、基準時 (R) を用いて全体像を示した (後述)。

(B) 通常用法と特殊用法の関係が解明されていない

現在形は現在の事柄を表すだけでなく、習慣的事柄も未来の事柄も過去の事柄も (歴史的現在) 表す。単に「○○を表す」とのみ記述するのではなく、なぜ現在形が過去の事柄や未来の事柄を表すことができるのかを説明しなくてはならない。

(C) 時制解釈のメカニズムが論じられていない

伝統文法は単に「○○時制は××を表す」と意味価値を記述するに留まる「用法中心」の記述である。聞き手の側に立って、「その時制を解釈するときどのようなメカニズムが働いているか」を説明しなくてはならない。たとえば *I was waiting for the train in the waiting room. An old man came in with a black dog. I had seen that dog somewhere before.* 「私は待合室で列車を待っていた。一人の老人が黒い犬を連れて入って来た。私はその犬を以前どこかで見たことがあった」という談話では、過去進行形 (was waiting)、過去形 (came)、過去完了形 (had seen) の三つの時制が使われているが、その三つの時間的關係はどのようなメカニズムによって解釈されるのかを示さなくてはならない。

(D) 単文中心であり談話の中での時制の働きが論じられていない

時制は単独で用いるものではなく、談話において他の時制とともに用いられる。したがって単文で考察するのではなく、もっと大きな談話レベルで時制の働きを分析するべきである。以下にあげるのはそれを試みた数少ない例外であり、後で詳しく見る。

i) ハラルト・ヴァインリヒ『時制論 文学テキストの分析』紀伊国屋書店、1982. (原著 Harald, Weinrich, *Tempus. Besprochene und erzählte Welt*, 1971)

「語りの時制」「説明の時制」という概念でテキストを分析している。

ii) Kamp, H. & C. Rohrer (1983), "Tense in Texts", R.R. Bauerle et als. (eds) *Meaning, Use, and Interpretation of Language*, De Gruyter: 251-269.

後の談話表示理論 (discourse representation theory) の先駆けとなった論文。

iii) Declerck, Renaat, *Tense in English : Its Structure and Use in Discourse*, Routledge, 1991.

中心場面 (central situation)、支配領域 (temporal domain)、束縛場面 (binding situation) などの概念を用いて、談話における時制同士の関係を明らかにした。

(3) この講義がめざすもの

(A) 時制の用法を羅列するのではなく時制体系の全体像を提示する。具体的には「二つのゾーン理論」として示す。

(B) なぜ現在時制が過去の出来事を表したり、If you shoot him, I will tell the police that you *murdered* him. のように過去時制が未来の事柄を表したりするのかを体系的に説明する。

(C) 時制形式を解釈するときに、聞き手の頭の中でどのようなメカニズムが働いてい

るのかを解明する。

(D) 単文ではなく談話の構築と理解という枠組みの中で時制を考える。

(4) 談話の定義

談話 (discourse) とは、話し手と聞き手の相互作用 (interaction) により、時系列に沿って、局所的に構築・処理される累加的 (incremental) な心的表象 (mental representation) である。

2. 英語にはいくつ時制があるのか

時制を考えるにあたって、そもそも英語にはいくつ時制があるかを知らなくてはならない。驚くべきことに、この点について研究者の見解の一致はいまだ見られていない。それはなぜだろうか。

2.1. 時制とアスペクト

英語にいくつ時制があるか定説がない最大の理由は、時間を表現するのに英語が時制とアスペクトの両方に頼る言語だからである。時制組織は言語によるばらつきが大きい。フランス語のように時制に大きく依存し、アスペクトが貧弱な言語もあれば、ロシア語や日本語のように時制が貧弱で、その分アスペクトを多用する言語もある。英語は時制とアスペクトの両方を同じくらい用いる言語である。

(1) 時制とアスペクト (相) の関係

時間は普遍的な非言語的概念であって、過去・現在・未来という三つの区分がある。時制というのは、動詞の形態とわれわれの時間の観念の間の対応というふうに解せられる。相は動詞によって表される行為がどのような様態で経験されたり捉えられたりするか (例えば、完了したものとか進行中とか) ということに関係する。一方、法は動詞の表す行為を確実さ、義務、必然性、可能性などの状況と関係づける。しかしながら、実際にはこれら三つの範疇はおたがいどうしかなり重なり合っている。とりわけ、現在、および過去時の表現は相と切り離して考えられないし、未来時の表現は法と密接に結びついている。

	単純形	複合形
現在時制	write	進行相 am writing (現在進行形)
過去時制	wrote	進行相 was writing (過去進行形)
		完了相 have written (現在完了形)
		had written (過去完了形)
		完了進行相 have been writing (現在完了進行形)
		had been writing (過去完了進行形)

(ランドルフ・クワーク、シドニー・ローゼンバウム『現代英語文法 大学編』紀伊国屋書店、1977) ※注：カッコ内の時制名は引用者が付けたものである。

(2) アスペクト (相) とは何か

相という概念は、時制 (tense) という概念と似ている点もあるが、異なった概念として理解すべきである。どちらも時間に関係するという点で類似しているが、その関係のしか

たが異なる。時制とは、ある 1 つの出来事と別の出来事との時間関係を述べるものである。John sang. の過去時制は、John が歌うという出来事と、発話という出来事の時間的關係を述べているのである。これにたいして、相は「ある 1 つの出来事の内部の時間構成を問題にするのである」[Comrie 1976]。たとえば、次の例では、

(1) John was reading when I entered.

I entered. という文は、私が入るという出来事を「1 つの点」として見ている。すなわち、始まり、中間、終わりが 1 つの点の中に含まれてしまっており、入るという行為をそれ以上分割せずに提示している。このような見方を持つものは完結相 (perfective aspect) と呼ばれる。一方、(1) の前半部 John was reading. は、John の読書の間中部を指し示している。つまり、出来事の内部の時間的構成に注目しているのである。このような意味を持つものは非完結相 (imperfective aspect) と呼ばれる。

* Comrie, Bernard, *Aspect : An Introduction to the Study of Verbal Aspect and Related Problems*, Cambridge Univ. Press, 1976. (荒木一郎他『現代英文法辞典』三省堂 : aspect の項)

【考察】

時制とアスペクトは密接に関係する概念だが区別すべきだという立場に立てば、進行形 (John was reading) は時制ではなくアスペクトということになる。その根拠のひとつに、アスペクトは時間の区分に関係なく実現するということがある。進行形は事態の未完了・進行中を表し、現在・過去・未来という時間区分とは独立に働く。

- i) John is reading. 現在進行形
- ii) John was reading. 過去進行形
- iii) John will be reading. 未来進行形

その一方、アスペクトは時制と組み合わせられて複雑な構成を見せる。次の例では、未来形・完了形・進行形が組み合わせられて未来完了進行形になっている。

- iv) By that time, John will have been reading for two hours.

その頃には、ジョンはすでに 2 時間読書をしていたことになるだろう。

また John has read. のような現在完了形もこの立場に立てば時制ではなくアスペクトに分類される。そうすると英語には現在形 (I read.), 過去形 (I read.), 未来形 (I will read.) の 3 つしか時制がないということになる。これが極小の立場である。

また英語には動詞の活用によらないが、出来事の時間関係を表す表現がいくつかある。

- v) John is going to read this book. (be going to ～ 近い未来の予定を表す)

ジョンはこれから本を読もうとしている。

- vi) John is about to read this book. (be about to ～ 直近の未来の出来事を表す)

ジョンは本を読むところだ。

もしこのような表現も時制に加えると時制の数は飛躍的に増える。Halliday, M.A.K., *An Introduction to Functional Grammar*, Arnold, 1985 では実に合計 72 の時制を認めている。

System I : finite	36
System II : sequent	24
System III : non-finite / modalized	12

(3) 時制中心の言語とアスペクト中心の言語

時制組織は言語によってばらつきが大きい文法範疇である。

i) フランス語

フランス語には英語の進行形 (John is reading.) に相当するものがない。「読んでいる」という進行相は現在形で表す (Jean lit.). また完了形は存在するが、現在完了の意味の他に、単なる過去として用いられる (Jean a lu.). フランス語は時制中心の言語であり、アスペクトは不活発で、補足的に用いられるに留まる。

ii) ロシア語

ロシア語には時制は現在・過去・未来しかないが、すべての動詞に完了体・不完了体のアスペクトの区別がある。ロシア語はアスペクト中心の言語である。

iii) 英語

英語は現在・過去・未来という時制と、進行相・完了相というアスペクトの両方を持ち、それらを複雑に組み合わせて用いている。

iv) 日本語

昔の日本語はキ・ケリという過去の助動詞、ヌ・ツ・タリ・リという完了の助動詞があり、事態の時間的展開を細かく区別していた。

我が谷は緑なりき。 (直接経験した過去)

昔、男ありけり。 (間接経験の過去)

風立ちぬ。 (確実な完了)

しかし現在ではすべて失われ、時制はタリに由来するタのみになった。アスペクト形式のテイルと次のように組み合わせて用いられる。

太郎は本を読む。(非過去形)

太郎は本を読んだ。(過去形)

太郎は本を読んでいる。(非過去形・継続相)

太郎は本を読んでいた。(過去形・継続相)

日本語の動詞には現在形も未来形もない。現代日本語は時制の極めて貧弱な言語である。

2.2. 文法的アスペクトと語彙的アスペクト

アスペクトを考える上では文法的アスペクトと語彙的アスペクトを区別しなくてはならない。

(4) 文法的アスペクト (外的アスペクト)

動詞の語尾変化や助動詞の付加によって形態的に表現されるアスペクトをいう。

ex. John came. / John is reading. / John has read.

(5) 語彙的アスペクト (内的アスペクト)

動詞が表す意味によって表現されるアスペクトをいう。伝統的には運動動詞 (action verb) と状態動詞 (state verb) という区別があるが、最も広く知られているのは Vendler の分類である。cf. Vendler, Zeno, *Linguistics in Philosophy*, Cornell Univ. Press, 1967

a) state verb 状態動詞

時間的に変化しない状態を表わし、終結点を持たない。

be, have, know, love, believe, desire, etc.

単純現在形で現在時を表すことができ、進行形にすることができない。

i) John *knows* the answer.

ii) *John *is knowing* the answer.

b) activity verb 活動動詞

動的事態を表し自然な終結点を持たず、事態の一部が実現されればその事態は生起したと認定される。

run, laugh, swim, push the cart, knock the door, etc.

for two hours のような継続時間を表す表現と共起するが、in two hours のような所要時間を表す表現と共起しない。

i) John *ran* for two hours.

ii) *John *ran* in two hours.

現在起きている出来事を表すには進行形にしなくてはならない。

iii) John *is running*.

c) achievement verb 到達動詞

動的で瞬間的に実現される事態を表す（伝統文法では瞬間動詞）。

arrive, find, stop, start, die, reach the summit, win the race, etc.

at 7 o'clock のように点的な時間表現と共起するが、for two hours / in two hours のように時間幅のある表現と共起しない。

i) John *arrived* at 7 o'clock.

ii) *John *arrived* for two hours / in two hours.

進行形にすると終結点に近づきつつあることを表す。

iii) John *is dying*.

d) accomplishment verb 達成動詞

動的で自然な終結点を持ち、終結点への到達にはしばらく時間がかかる事態を表す。

paint a picture, build a house, draw a circle, read a novel, etc.

in two hours と共起するが、for two hours と共起しない。

i) John *made a chair* in two hours.

ii) *John *made a chair* for two hours.

	action	duration	telicity
state	×	○	×
activity	○	○	×
achievement	○	×	○
accomplishment	○	○	○

N.B. telicity 「終結性」とは、動詞が表す事態が自然な終結点を持つかどうかを意味する。持つ動詞を **telic verb** 「終結動詞」、持たない動詞を **atelic verb** 「非終結動詞」と呼ぶ。訳語に「限界動詞」「非限界動詞」、「完結動詞」「非完結動詞」、「未完了的動詞」「非完了的動詞」などが用いられることもあるが、「未完了的」「完了的」は **imperfect / perfect, imperfective / perfective** と混同されるのでふさわしくない。

【考察】

Vendler による上記の分類は目的語や付加詞を変化させることで変わることがある。

i) **run** は活動動詞だが、**run ten miles** にすると終結点が生まれて達成動詞になる。

John ran ten miles in an hour.

push the cart は活動動詞だが、**to the station** を付加すると達成動詞になる。

John pushed the cart to the station in an hour.

ii) **draw a circle** は達成動詞だが、**draw circles** のように目的語を複数形にすると終結点がなくなって活動動詞になる。

John drew circles for an hour.

2.3. 英語の時制

以上の考察を踏まえて、ここでは暫定的に次の形式を英語の時制として扱う。

- | | |
|---------------|--|
| i) 現在形 | <i>John runs two miles every morning.</i> |
| ii) 現在進行形 | <i>John is running in the court yard.</i> |
| iii) 現在完了形 | <i>John has run two miles.</i> |
| iv) 過去形 | <i>John ran two miles.</i> |
| v) 過去進行形 | <i>John was running (when I saw him).</i> |
| vi) 過去完了形 | <i>John had run two miles.</i> |
| vii) 過去未来形 | <i>John said that he would run two miles.</i> |
| viii) 過去未来完了形 | <i>John said that he would have run two miles by then.</i> |
| ix) 未来形 | <i>John will run two miles.</i> |
| x) 未来完了形 | <i>John will have run two miles by then.</i> |

時制とアスペクトの峻別は文法の観点からは必要かも知れないが、談話の構築・理解という言語処理の観点からは必然性に乏しい。現在進行形はアスペクト形式であるが、英語で発話時現在に起きている事態を表すには現在進行形を用いるしかない(**state verb**を除く)。

2.4. 日本語の時制

日本語には時制形式「タ」とアスペクト形式「テイル」による次の組み合わせがある。

- | | |
|-------------|---------------------|
| i) 非過去形 | 太郎は向かいに座る。(ル形) |
| ii) 過去形 | 太郎は向かいに座った。(タ形) |
| iii) 非過去進行形 | 太郎は向かいに座っている。(テイル形) |
| iv) 過去進行形 | 太郎は向かいに座っていた。(テイタ形) |

3. Reichenbach の時制システム

Reichenbach, H., *Elements of Symbolic Logic*, The Free Press, 1947. は、発話時 (S)、出来事時 (E)、基準時 (R) の組み合わせによって時制を体系的に表現できるとした。以下の例で S, E は S と E が同時であることを、S—E は E が S より時間的に後であることを表す。

現在・過去・未来という 3 つの時間領域と、E と R の先行・同時・後続の関係を組み合わせると、理論的には次の図のように 9 つの時制が得られる。

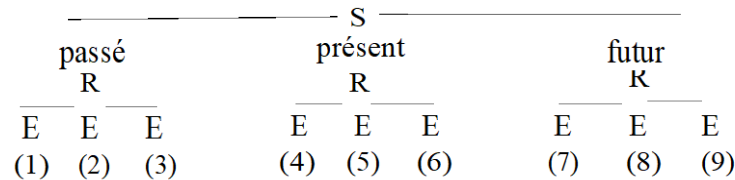


Fig. 2

(1) 上の図の時制を実際の英語の時制に当てはめてみよう。

(1) E—R—S：過去完了形

John *had left* [E] his house when we arrived [R].

私たちが到着した時、ジョンはすでに立ち去っていた。

(2) E, R—S：過去形

John *made* coffee [E, R].

ジョンはコーヒーを淹れた。

(3) R—E—S：過去未来形

John thought [R] that Mary *would regret* [E] her decision.

メアリーは自分が決めたことを後悔するだろうとジョンは考えた。

(4) E—R, S：現在完了形

John *has lived* [E] in Paris for five years.

ジョンはパリに 5 年住んでいる。

5) E, R, S：現在形

John *lives* in London.

ジョンはロンドンに住んでいる。

6) R, S—E：未来形 (S—R, E もありとされる)

John *will make* [E] coffee .

ジョンはコーヒーを淹れるだろう。

7) S—E—R：未来完了形

John *will have come* [E] back by noon [R].

ジョンは正午までに戻っているだろう。

8) S—R, E：該当する時制なし

9) S—R—E：該当する時制はあるが名称なし (未来未来形?)

John *will tell* [R] the police that Bill *will murder* [E] him.

ビルが自分を殺すだろうとジョンは警察に告げるだろう。

(2) Reichenbach のシステムにはいくつか問題点があると言われている。

(A) 過去形と過去進行形、現在形と現在進行形、未来形と未来進行形を区別することができない。このシステムにはアスペクトが組み込まれていないためである。次の二つはどちらも [E, R—S] としか表示できない。

i) John *made* coffee.

ii) John *was making* coffee.

フランス語では英語の過去進行形に相当するものが、アスペクト形式ではなく時制で表現されるのでいっそう深刻である。

iii) Jean *fit* du café. (単純過去形)

ジャンはコーヒーを淹れた。

iv) Jean *faisait* du café. (半過去形)

ジャンはコーヒーを淹れていた。

(B) 次の例では S, R, E 以外に、*thought* を表す時点が必要になるが、Reichenbach のシステムではこれを表示することができない。Reichenbach のシステムは間接話法の時制まで考えていないためである。

v) John *thought* that Mary *would have arrived there* [E] before noon [R].

メアリーはそこに正午までに着くだろうとジョンは考えた。

出来事の時間的前後関係は下の図のようになるが、*thought* に与える記号がない。

?	E	R	S
thought	would have	noon	
	arrived there		

(C) 次の過去形は Reichenbach のシステムが予測する用法に合致しない。

vi) [If you shoot him] I *will tell* [R] the police that you *murdered* [E] him.

「もし君が彼を撃ったら」僕は警察に君が彼を殺したと言うよ。

この文が表す事態は S—E—R であり、Reichenbach のシステムでは未来完了形で表されるはずである。過去形は E, R—S なので、E は S より過去でなくてはならないが、この例では過去形が S より未来の事態を表している。

(D) 過去形と現在形では E と R が一致していて、R が事実上働いていない。R は When he arrived at the station (R), the train had already left. (E) の過去完了形のように、ある基準点より前に起きた出来事を表す時制にたいしてのみ有効である。

(3) 考 察

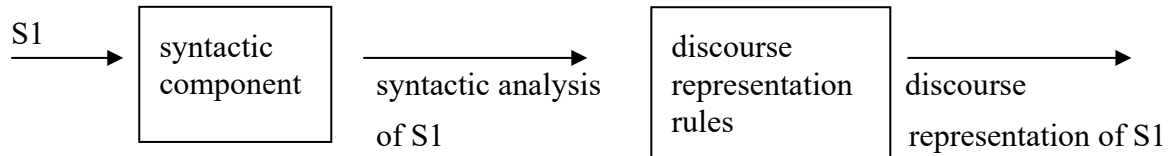
上にあげた問題点のうち(A)はアスペクトに関わる問題である。Reichenbach のシステムを使う人は通常、このシステムにアスペクトを加味することで問題を解決する。

(B) (C) は間接話法に関する問題である。Reichenbach のシステムには話法のメカニズムが組み込まれていない。したがって主節の時制に限定すれば Reichenbach のシステムは機能するが、間接話法の補文節は別個に考える必要がある。

4. Kamp & Rohrer (1983) の時制論

Kamp, Hans & Christian Rohrer, “Tense in texts”, R. R. Bauerle et als.(eds) *Meaning, Use and Interpretation of Language*, Walter de Gruyter, 1983.では、後に談話表示理論 (discourse representation theory) として有名になる理論による時制論が提唱されている。

(1) まず Kamp & Rohrer は、文 $S_1 \dots S_n$ からなるテキストの解析手順を次のように考える。



S_1 がまず文法の統語部門に入力されて統語分析を受ける。次にその出力に談話表示規則が適用されて、 S_1 の談話表示を得る。こうして得られた談話表示を下の引用では K_1 と呼んでいる。

When this representation K_1 has been formed, the second sentence is parsed and its syntactic structure used to incorporate the information it carried into the already constructed representation. This yields an expanded representation K_2 . K_2 will then be expanded in turn to a larger representation K_3 through incorporation of the third sentence; and so on until all n sentences of the discourse have been dealt with.

表示 K_1 が作られると、2 番目の文が解析され、その統語構造はそれが含む情報をすでに構築されている表示に統合する。こうして拡張された表示 K_2 を得る。今度は K_2 が 3 番目の文を統合することで拡張されて K_3 が得られる。こうして談話のすべての文が処理されるまでこの操作が続くのである。

(2) 談話の理解には出来事の順序まで組み込んだ意味表示が必要となる。

In discourse representation theory the problem is solved in the following manner. The principle that a sentence in the *passé simple** introduces a new event, and that this event follows the last event already introduced, is incorporated into the rules for discourse representation construction. These rules insure that the discourse events that are introduced into the representation as the sentences are processed are temporally related in the representation just as their real counterparts must be ordered in actuality. These temporal relations in the representation then become an integral part of the truth conditions of the discourse if we define truth as Kamp (1979) proposes: A discourse D with DRS K is *true* iff it is possible to embed K homomorphically into the real world, i. e. to associate with (in particular) the discourse events of K real events that meet all conditions, including those pertaining to temporal order, which K specifies of the corresponding discourse events. 注 : *passé simple* フランス語の単純過去で、英語の *He danced.* に相当する過去形。

談話表示理論では問題は次のように解決される。単純過去の文は新規イベントを導入し、このイベントはすでに導入済みの最後のイベントに後続するものであるという原則が、談話表示構造を構成する規則に組み込まれる。この規則のおかげで、文が処理されるにつれて談話に導入されるイベントが、現実世界における順番どおりに表示のなかで関係づけられるということが保証される。こ

のイベント同士の時間関係は、談話の真理条件の不可欠な一部をなす。Kamp (1979)では談話の真理条件を次のように規定している。談話表示構造 K を持つ談話 D が真であるのは、 K を現実世界に同形的に埋め込むことができる場合であり、その場合に限る。すなわち、(とりわけ) K の談話イベントに、 K が細かく定めている時間関係を含むすべての条件を満たす現実のイベントを対応させることができる場合である。

(3) Kamp & Rohrer はフランス語の半過去形 (未完了過去) の例を挙げて、談話表示理論における時制の働きを次のように説明している。

a. Quand Pierre entra, Marie téléphona.

ピエールが中に入った時、マリーは電話した。

b. Quand Pierre entra, Marie téléphonait.

ピエールが中に入った時、マリーは電話していた。

a. の téléphona (phoned)は単純過去形で、entra (entered) に後続する出来事を表す。

Kamp & Rohrer は次のような半過去形の処理規則を提案している。

i) the sentence in the imparfait introduces a new discourse state s .

半過去形に置かれた文は、新たな状態 s を談話に導入する。

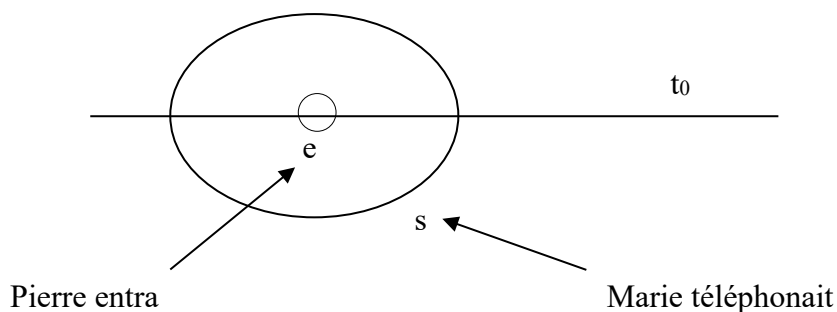
ii) this state lied before the speech point

この状態 s は発話時現在より前にある。

iii) s contains the last event e (introduced by a sentence in the passé simple)

状態 s は、(単純過去形の文によって導入された) 最後の出来事 e をその中に包含する。

この規則によって、上の例 b. の téléphonait (was phoning) は、単純過去形 entra (entered) を包含する状態 (s)を導入する。Kamp & Rohrer はこの関係を下の図で示している。



(4) Kamp & Rohrer の談話表示理論による時制の扱い方には次のような特色がある。

(A) 談話表示理論では、文の表す意味は談話表示構造 (discourse representation structure = DRS) として表現される。たとえば過去形の文は「談話表示構造に新規イベントを書き込め」という指令として解釈される。伝統文法の「過去形には〇〇用法がある」というような用法の記述ではなく、文の意味を構成する規則として規定されている点が新しい。

(B) フランス語の半過去 (未完了過去) を照応的時制とした点が新しい。名詞句の照応、たとえば *Peter entered. He danced.* では、*he* は新しい指示対象を導入せず、先行詞の *Peter* と同一人物を表す。同様に半過去は新しいイベントを談話に導入せず、すぐ前に導入されたイベント (*Peter entered.*) と同時的かつそれを包含する状態を導入すると

した。これは新規イベントを導入しないため、半過去はテキスト内の時間を前に進めないという伝統文法の言い方を別様に表現したものである。

(C) 単純過去は談話に新規イベントを導入し、テキストの時間を前に進めるとした。

ex. *Mary woke up (E1). She washed her face (E2), took breakfast (E3) and went out (E4).*

メアリーは起きた。彼女は顔を洗って、朝食を摂り、外に出かけた。

E1	E2	E3	E4
----	----	----	----

しかしこの考え方には実は少し問題がある。E1→E2→E3→E4 の順序で出来事が起きたと理解されるのは、「時制形式の持つ意味」の問題ではなく、語用論（私たちが世界について持つ知識）の問題である。過去形は出来事が発話時現在より過去に起きたということしか表さない。

(5) Kamp & Rohrer が指摘したその他の問題点

a. 半過去形はテキストの時間を前に進めないとされるが、時間を進める場合がある。

Jean tourna l'interrupteur. La lumière éclatante l'éblouissait.

ジャンはスイッチをひねった。まぶしい光が彼の目を眩ませた。

b. 単純過去形は時間を前に進めるとされるが、時間を前に進めない場合がある。

i) *Marie chanta et Pierre l'accompagna au piano.* [同時的]

マリーは歌い、ピエールはピアノで伴奏した。

ii) *L'été de cette année-là vit plusieurs changements dans la vie de nos héros. François épousa Adèle, Jean-Louis partit pour le Brésil et Paul s'acheta une maison à la campagne.*

その年の夏にはこの物語の登場人物たちには人生のいろいろな出来事があった。フランソワはアデルと結婚し、ジャン・ルイはブラジルに行き、ポールは田舎に家を買った。

[*épousa, partit, s'achetait* が表す出来事は、*vit* が表す出来事に含まれ、また 3 つの起きた順序はどのようなでもかまわない。]

5. Cutrer (1994) の時制理論

Cutrer, Michelle, *Time and Tense in Narrative and in Everyday Language*, Ph. D. thesis, University of California, San Diego, 1994. は、Fauconnier のメンタル・スペース理論による時制論である。メンタル・スペース理論については、ジル・フォコニエ『メンタル・スペース 自然言語理解の認知インターフェイス』坂原茂他訳、白水社、1996 を見よ。ただし、原著 *Espaces mentaux – Aspects de la construction du sens dans les langues naturelles*, Editions de Minuit, 1984. の時制に関する章 IV. 3. Transfers temps-espace は例文のフランス語が英語にしにくいためか、英語版では削除されており、英語版を底本とする日本語版にも含まれていない。

(1) メンタル・スペースとは何か

Fauconnier は著書の中で明確に定義を与えていないが、おおまかに言って言語によって表現される心的構築物であり、要素 {a, b, c, ...} と要素間の関係 {Rab, Rbc, Rca, ...} を持つ

増加可能集合 (incrementable set) である。

井元秀剛『メンタル・スペース理論による日仏英時制研究』ひつじ書房、2010 ではスペースを次のように定義している。

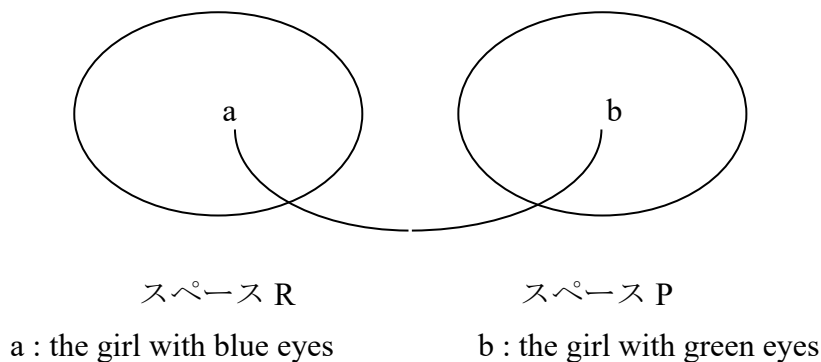
「述定 (predication)の対象となる最小の心的表象が存在し、述定による属性を保持していると考えられる領域」

メンタル・スペースはスペース構築子 (space builder) と呼ばれる言語表現によって開かれることが多い。in Lenn's picture, in John's mind, in 1929, Max believes that ... などがスペース構築子である。

(2) メンタル・スペース例示

In Lenn's painting, the girl with blue eyes has green eyes.

レンの絵の中では青い目の少女は緑の目をしている。



- a. スペース R は「現実スペース」で、他のすべてのスペースに対して親スペースとして働く。スペース P は「絵画スペース」で、「絵に描かれた世界」を表す。
- b. a と b は談話指示子 (discourse referent) で、それぞれ「青い目をした女の子」と「緑の目をした女の子」を表す。
- c. a と b を結ぶ線はコネクタと呼ばれ、この例では a と b が同じ指示対象であることを表す同一性コネクタ (ID コネクタ) である。
- d. a はスペース R において「青い目をしている」という属性を持ち、b はスペース P において「緑の目をしている」という属性を持つ。The girl with blue eyes has green eyes. は矛盾文であるが、In Lenn's painting というスペース構築子を付加することによって矛盾は解消され正しい解釈を得る。つまり、現実には青い目をした女の子がレンの絵では緑の目の女の子として描かれているということである。

(3) メンタル・スペース理論の理論的意味

- a. 例文の定名詞句 the girl with blue eyes はスペース R において解釈され、the girl with green eyes はスペース P において解釈される。このことは文中の名詞句はすべて適切な解釈領域を持つことを意味する。メンタル・スペース理論とは、名詞句に適切な解釈領域を付与する理論である。
- b. メンタル・スペース理論は領域分割の理論であると同時に、情報の分散化をめざした理論である。すなわち意味のすべてを言語記号に背負わせるのではなく、意味の一部をス

ペース構成によって表現する。

- c. 古典的な哲学的意味論では、指示表現 (ex. the girl with blue eyes) は内包と外延を持つとされる。内包とは指示表現の意味内容で、外延とは指示対象である。多くの場合、外延は言語外的指示対象 (extralinguistic referent) を意味し、指示表現は直接的に言語外的指示対象を指す (refer) と考えられてきた。メンタル・スペース理論では、指示 (reference) は言語と世界の直接的関係ではなく、言語を用いる話し手・聞き手の心的領域（スペース）の構築と属性付与の問題であるとしている。

(3) Cutrer (1994) の時制解釈システム

Cutrer の理論では 4 つのスペースが設定されている。

- a. FOCUS : The focus space is the space where meaning is currently being constructed. It is the current, most active space; the space which an utterance is “about”. The FOCUS space may be identified by a variety of cues, both grammatical and pragmatic.

FOCUS スペースは意味がまさに構築されているスペースである。それはまさに今見られていて最も活発なスペースであり、発話が「それについて述べている」スペースである。Focus スペースは文法的または語用論的なさまざまな特徴によってそれと認定できる。

- b. EVENT : An EVENT space is the temporal space in which the event encoded in the verb takes place. The EVENT space is the space in which the full structure of the verb is constructed.

EVENT スペースは動詞の表す出来事が生じたスペースであり、動詞のもつ構造のすべてが構築される。

- c. BASE : The BASE space is the initial or origin space in any hierarchical organization of spaces. The BASE space represents a temporal frame which contains the initial conceptualizing V-POINT, from which events or states are conceived, evaluated, measured, and/or constructed. This initial V-POINT serves as the center of reference from which deictic relations typically or canonically are calculated. A BASE space is always a PRESENT one by default; a PAST or FUTURE space cannot be BASE, since a PAST or FUTURE space must access some higher space in a hierarchy of spaces for the interpretation of tense.

BASE スペースはスペース構成のなかの始発スペースで原点となる。BASE はいちばん初めの概念化 V-POINT を含む時間的フレームを表す。この最初の V-POINT を起点として、出来事や状態が概念化され、評価され、計測され、そして/または構築される。この始発 V-POINT は直示的關係が典型的にまたは規範的に計算される原点となる。BASE はデフォルトで常に「現在」である。「過去」や「未来」のスペースは BASE になることができない。なぜなら「過去」や「未来」スペースは時制解釈のためにスペースの階層の中でより高次のスペースにアクセスしなくてはならないからである。

- d. V-POINT : In its strongest version V-POINT is the center of conceptualization and consciousness of the SELF to whom an utterance is attributed. (...) The strongest version of V-POINT corresponds to traditional notions of viewpoint or narrative point of view, and to Genette’s notion of “focalizer”. (Genette 1980) In its weakest, most abstract version,

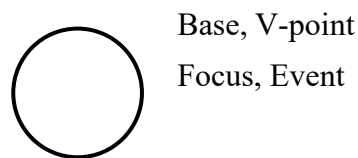
V-POINT is composed of a single dimension, such as a spatial or temporal dimension, or a limited subset of dimensions. This weakest version of V-POINT corresponds to notions of ‘vantage point’ (Langacker), reference point (Reichenbach), or the what Talmy (1983) refers to as ‘perspective point’, the point within a scene at which one conceptually places ones “mental eyes” to look out over the rest of the scene.

V-POINT の最も強い解釈では、V-POINT は概念化の中心であり、発話主体の SELF の意識の中心である。これは伝統的な「視点」や語りの中の「視点」に相当し、ジュネットの「焦点化者」に当たる。最も弱く抽象的な解釈では、V-POINT は空間または時間という単一の次元、もしくはごく少数の次元で構成される。この弱い解釈の V-POINT は「視点」(Langacker)、「基準点」(Reichenbach)、あるいは Talmy (1983) の「眺望点」に相当する。眺望点とは、ある場面に含まれる点で、その点に「心の眼」が置かれて残りの場面を眺めるのである。

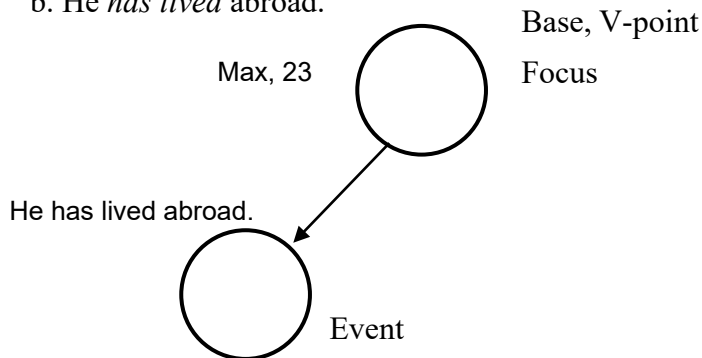
(4) メンタル・スペース理論による時制論の例示

Max is twenty-three. He *has lived* abroad. In 1990, he *lived* in Rome. In 1991 he *would move* to Venice. He *would then have lived* a year in Rome.

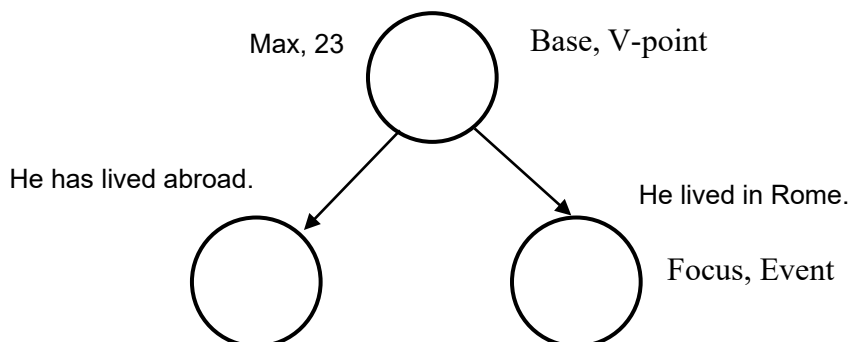
a. Max is twenty-three.



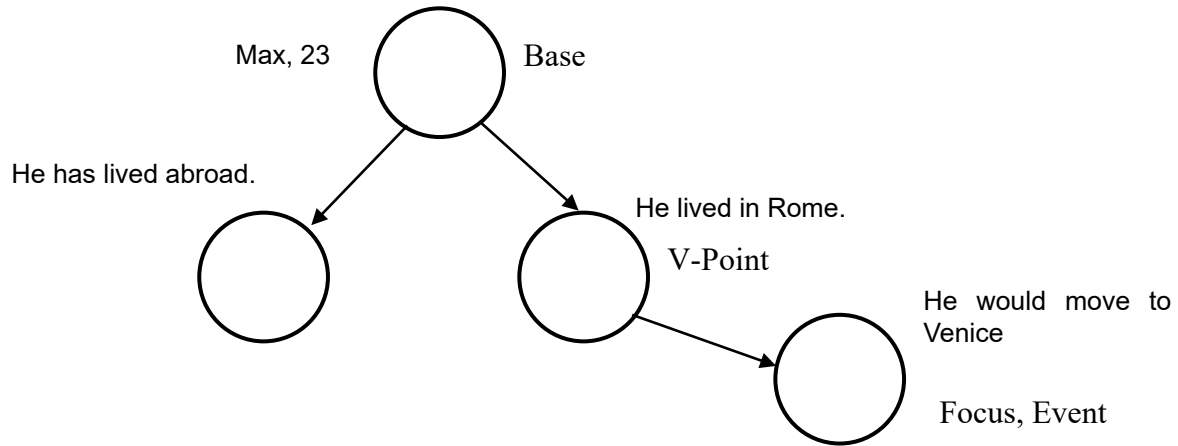
b. He *has lived* abroad.



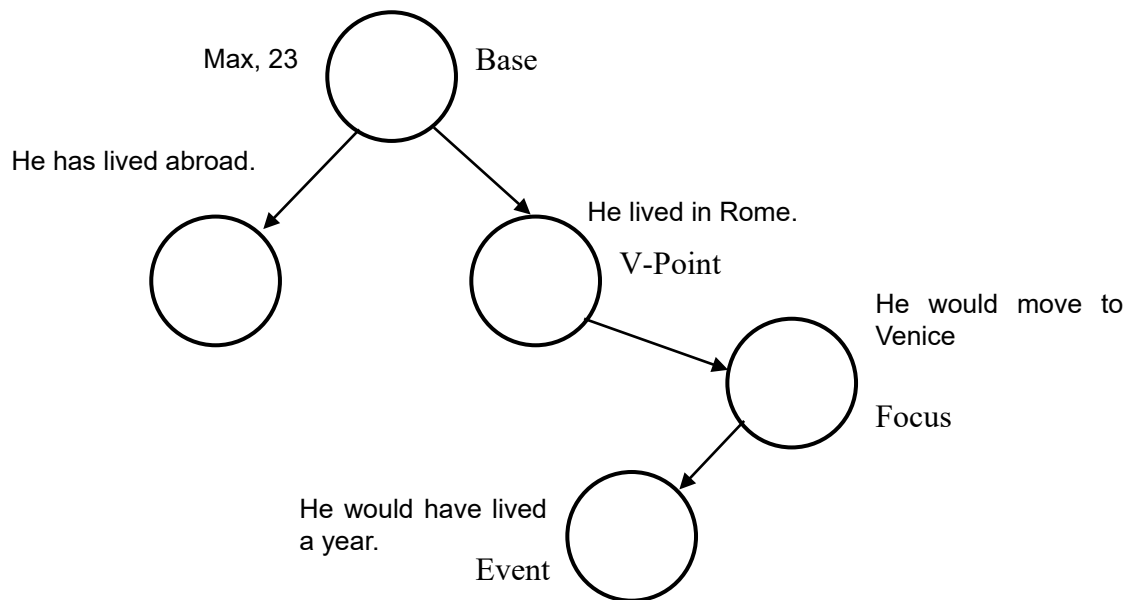
c. In 1990, he *lived* in Rome.



d. In 1991 he *would move* to Venice.



e. He *would then have lived* a year in Rome.



(5) Reichenbach のシステムとの比較

- a. BASE は S（発話時）に相当する。
- b. EVENT は E（出来事時）に相当する。
- c. R（基準点）は FOCUS と V-POINT のふたつに分割される。

(6) Focus と V-POINT を区別すると、過去完了形が持つ 2 つの意味価値を表示仕分けることができるという利点がある。

- a. Today is Tuesday. I talked to Leopold last Friday. Last Friday, he *had* already *finished* his project.

今日は火曜日だ。私は先週の金曜にレオポルドと話した。先週の金曜には、彼はもうすでにプロジェクトを完成させていた。

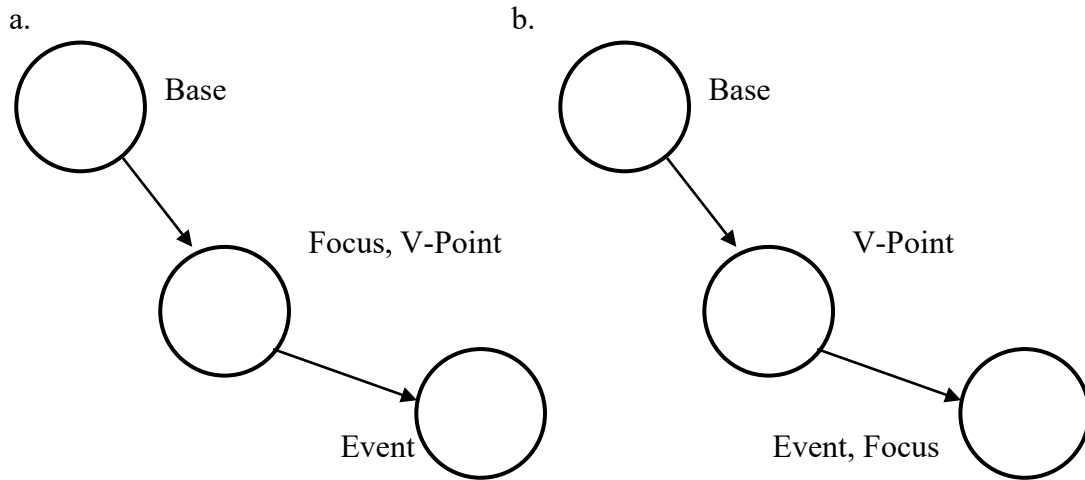
[過去のある時点においてすでに完了していたことを表す]

- b. Today is Tuesday. Natasha talked to Leopold last Friday. He *had finished* his project last Friday at 6.

今日は火曜日だ。ナターシャは先週の金曜にレオポルドと話した。彼は先週の金曜の 6 時

にプロジェクトを完成させた。[過去の過去の出来事を表す]

この 2 つの文をメンタル・スペースで表すと次のようになる。Focus の場所のちがいに注目されたい。



(7) メンタル・スペース理論による時制理論では、Reichenbach のシステムでは扱えなかった次の例も扱うことができる。

John *thought* that Mary would have come back before the race starts.

- i) BASE : 発話時点
- ii) V-POINT : John thought
- iii) EVENT : Mary would have come back
- iv) FOCUS : before the race starts

(8) 談話の中での時制の働きという点では、メンタル・スペース理論による時制理論で最も重要なのは次の談話の組織化の原則である。

Principles of Discourse Organization

I. General Principles

1. At any given moment in the discourse interpretation process, there may be only one FOCUS space. The output of a single clause may have only one FOCUS space.

談話の意味解釈のどのポイントにおいても、FOCUS スペースはひとつしかない。単文の出力が持つ FOCUS スペースはひとつに限られる。

2. There may be only one BASE in each hierarchical configuration of spaces, although more than one configuration and thus more than one BASE may be accessed for a single utterance.

スペースの階層的構造において、BASE はただひとつしかない。ただし、ひとつの発話について、ひとつ以上の構造と BASE が与えられることがある。

3. The BASE is the initial V-POINT

BASE は始発の V-POINT である。

II. Operational Principles

4. If FOCUS is BASE, V-POINT is also BASE.

もし FOCUS が BASE にあるならば、V-POINT もまた BASE にある。

N.B. FOCUS が BASE にあるのは現在形と現在完了形であり、V-POINT はどちらも BASE にある。対偶を取ると、V-POINT が BASE になれば FOCUS が BASE に置かれることはないことになる。

5. A new space is built from BASE or FOCUS.

新しいスペースは BASE か FOCUS から作られる。

N.B. BASE は発話時現在なので、いつでも新たな出来事を述べる起点となる。新しいスペースは FOCUS からしか作れないというのは、語りの出来事連鎖に関わる原則である。次の場面に進むときには時間が進行し、前の場面に戻るときには時間を逆行する。

6. BASE may shift to any V-POINT, or to any previous BASE.

BASE はどんな V-POINT にも移動することができ、どんな前の BASE に戻ることもできる。

N.B. これは談話における視点移動に関わる原則であり、V-POINT が新たな視点中心になりうることを定めている。

7. FOCUS can shift to an EVENT space, to a BASE space, to a previous FOCUS space, or to a new space.

FOCUS が移動することができるのは、EVENT スペース、BASE スペース、前の FOCUS スペース、あるいは新しいスペースである。

N.B. FOCUS とは映写フィルムに喩えて言うならば、今まさに目の前に映写されて見ているコマである。FOCUS が EVENT に移動するのは新たな出来事が起きたからである。FOCUS が BASE に移動するのは過去の出来事から現在へと戻るときである。前の FOCUS に移動するのは時間を巻き戻すときである。

8. V-POINT can shift to FOCUS or to BASE.

V-POINT は FOCUS か BASE に移動できる。

N.B. V-POINT は視点なので、いつでも BASE に戻ることができる。また V-POINT は FOCUS になったことのあるスペース、つまり目の前に映写されたことのあるコマにしか移動できないと定めている。たとえば *John has lived in France.* では FOCUS / V-POINT は BASE (発話現在)にあるので、*John has lived in France.* が書き込まれた EVENT スペースに V-POINT を移動することはできない。

9. EVENT can be FOCUS or it can shift to FOCUS or to a new space which is a daughter of V-POINT.

EVENT は FOCUS になることができる。あるいは FOCUS に移動したり、V-POINT と娘の関係にある新しいスペースに移動できる。

N.B. EVENT は FOCUS になりうる。つまりどんな出来事でも焦点を当てることができる。またそれまで FOCUS でなかった EVENT が FOCUS になることもできる。副次的出来事に光が当たると考えればよい。また V-POINT の娘スペースとは、例をあげれば完了を表す過去完了形 (*At 7 o' clock, John had already come home.*)で、これに *He came home at 6:30.* と続ければまさにこのケースである。逆に言うと、FOCUS であった EVENT スペースが単

なる EVENT に格下げされることは許されない。

(9) 上の談話原則をいくつかの例で示してみる。

a. Have you met my brother? — I met him yesterday at 2 o'clock.

[BASE, V-POINT, FOCUS]—[EVENT] [BASE, V-POINT]—[EVENT, FOCUS]

FOCUS が BASE から EVENT に移動しており、II. 7. と 9. の原則に合致して適格である。

b. What happened yesterday at 2 o'clock? — *I have met your brother. (Cutrer 1994 : 210)

[BASE, V-POINT]—[EVENT, FOCUS] [BASE, V-POINT, FOCUS]—[EVENT]

FOCUS が EVENT から BASE / V-POINT に移動しており、これは II. 9. が禁じている移動である。

一般に、同じ出来事に言及するとき、最初は現在完了形で、二度目は過去形で言及するのが原則であり、その逆は許容されない。

c. I have lived in Rome. I lived there 3 years ago.

d. *I lived in Rome 3 years ago. I have lived in Rome.

また II. 9. の原則は、現在完了形と時の副詞が共起しないことを説明する。

e. *I have met John yesterday / 3 days ago.

時の副詞は FOCUS スペースを過去に指定するが、現在完了形では FOCUS は BASE にあり現在時だからである。

(10) Cutrer の理論ではアスペクトは次のように規定されている。

a. PROGRESSIVE identifies or cues construction of an EVENT space N. It indicates that:

進行相は EVENT スペース N を同定したり構築するよう指示し、次のことを表す

i) N is not in FOCUS

N は FOCUS ではない。

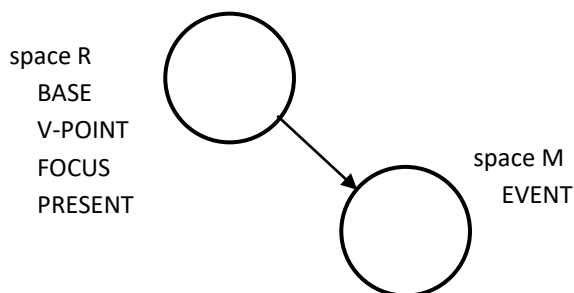
ii) N's parent is V-POINT

N の親スペースが V-POINT である。

iii) the time period represented in N includes V-POINT. V-POINT is during N.

N が表す時間幅に V-POINT は含まれる。V-POINT は N の期間内にある。

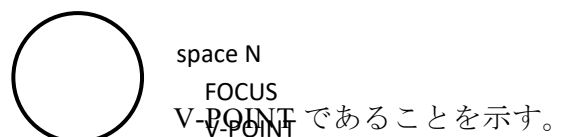
ex. John is writing a letter.



b. The IMPERFECTIVE identifies a FOCUS

space N and indicates that N is V-POINT.

未完了相は FOCUS スペース N を同定し、N が



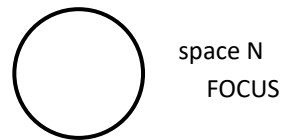
であることを示す。

c. The PERFECTIVE identifies a FOCUS space

N and indicates that N is not V-POINT

完了相は FOCUS スペース N を同定し

N が V-POINT でないことを示す。



(11) Genette の物語言説における焦点化理論

Cette réduction admise, le consensus s'établit sans grande difficulté sur une typologie à trois termes, dont le premier correspond à ce que la critique anglo-saxonne nomme le récit à narrateur omniscient et Pouillon « vision par derrière », et que Todorov symbolise par la formule Narrateur > Personnage (où le narrateur en sait plus que le personnage) ; dans le second, Narrateur = Personnage (le narrateur ne dit que ce que sait tel personnage) : c'est le récit à « point de vue » selon Lubbock ou à « champ restreint » selon Blin, la « vision avec » selon Pouillon ; dans le troisième, Narrateur < Personnage (le narrateur en dit moins que n'en sait le personnage) : c'est le récit « objectif » ou « behaïouriste », que Pouillon nomme « vision du dehors ». Pour éviter ce que les termes de *vision*, de *champ* et de *point de vue* ont de trop spécifiquement visuel, je reprendrai ici le terme un peu plus abstrait de focalisation, qui répond d'ailleurs à l'expression du Brooks et Warren : « focus of narration ».

Nous rebaptiserons donc le premier type, celui que représente en général le récit classique, récit *non-focalisé*, ou à *focalisation zéro*. Le second sera le récit à focalisation interne, qu'elle soit fixe (...) ou variable, (...) ou multiple. (...) Notre troisième type sera le récit à focalisation externe, popularisé entre les deux guerres par les romans de Dashiell Hammet, où le héros agit devant nous sans que nous soyons jamais admis à connaître ses pensées ou sentiments, et par certaines nouvelles d'Hemingway, comme *The Killers* ou davantage encore *Hills Like white Elephants* (...)

(Genette, Gérard, *Figures III*, Editions du Seuil, 1972)

このように問題を絞ることを認めてもらえるなら、以下に提出する三項からなる類型論について合意が得られるのも、さして困難なことではあるまい。その第一項は、アングロ=サクソン系の批評において全知の語り手による物語言説と呼ばれているものに一致する。プイヨンが「背後からの視像」と呼んでいるのがまさにこれで、トドロフはこれを《語り手>作中人物》という公式で象徴化している（すなわち、語り手は作中人物よりも多くのことを知っている、というかもっと正確には、語り手はどの作中人物が知っているよりも多くのことを語る）。第二の項は《語り手=作中人物》と公式化される（語り手は、ある作中人物が知っていることしか語らない）。ラボックのいう「視点」を持った物語言説、あるいはブランのいう「視野を制限された」物語言説というのがこれに相当し、プイヨンはこれを「ともにある視像」と呼んでいる。第三の項は《語り手<作中人物》という公式になる（語り手は作中人物が知っていることよりも少なくしか語らない）。これは「客観的」もしくは「行動主義的」な物語言説のことで、プイヨンの言う「外部からの視像」に相当する。さて、視像とか視野とか視点といった術語には、あまりにも固有に視覚的なものがまわりついているので、そうした視覚性を払拭すべく、私としては本書において、焦点化というさらに抽象度の高い術語を採用することにしよう。なおこの術語はブルックスとウォーレンの用いた「語りの焦点」という表現に符合するものである。

そういうわけでわれわれは、第一のタイプ、つまり一般的には古典的な物語言説によって代表されるようなタイプを、非焦点化の物語言説、もしくは焦点化ゼロの物語言説と呼びなおすことにし

よう。第二のタイプは、内的焦点化の物語言説ということになる。この第二のタイプはさらに三つに分かれるのだが、その第一は内的固定焦点化である。(…) 第二の内的焦点化は、内的不定焦点化である。(…) 第三の内的焦点化は、内的多元焦点化である。(…) さて第三のタイプであるが、これは外的焦点化の物語言説ということになる。この種の技法を兩次大戦間に普及させたのはダンシール・ハメットの小説で、彼の作品の主人公はたしかにわれわれの眼前で行動するのだけれども、主人公の思考や感情については、われわれは決して知ることができない。同じくこの技法を普及させたものに、ヘミングウェイのいくつかの中編小説があつて、たとえば『殺し屋ども』とか、さらに恰好な例としては『白象に似たる山々』がある (…)

(ジェラルド・ジュネット『物語のディスクール 方法論の試み』花輪光他訳、水声社、1985)

(12) 非焦点化（焦点化ゼロ）の物語言説の例

あたりが暗くなる少し前に、ディロンは狭い裏通りから姿を現して、角で足を止めた。みぞれ混じりの雨が、強い風に吹かれて雪のように舞いながら、セヌ川の上を渡ってゆいく。一月のパリとはいえ、たいへんに寒い日であった。リーファー・コート、まびさし付きの帽子、ジーンズにブーツという姿のディロンは、川の畔で働く労働者のように見えるが、もちろんそんな人間ではない。

両手で包むようにして煙草に火をつけ、しばらく影の中にたたずんで、丸石を敷いた広場の反対側にある小さなカフェの灯りを眺めていた。やがて煙草を捨て、両手をポケットの奥に深々と突っ込むと、広場を横切り始めた。

カフェの入り口付近の暗がり、二人の男がやってくるディロンをじっと見つめていた。一人がささやいた。「あの男にちがいない」

男が動きかけた。もう一人が引き止めた。「いや、中に入るまで待て」

(ジャック・ヒギンズ『嵐の眼』早川書房、原著 Jack Higgins, *Eye of the Storm*, 1992)

(13) 内的焦点化の物語言説の例

網をひきはじめた瞬間、コンラッドはそれが死体だとわかった。重さはあるし、網はビーチと外砂州のあいだの大波にもまれて上下しているのだが、両手のなかでぴくぴくと動く、いつもの感触がなかった。魚が網目にはげしくぶつかる、ある強烈な躍動感が。彼は口口に声をかけなかったが、ちらっと見ると、友人もおなじことを感じているのが見てとれた。

ビーチの四十ヤードほど先にいるロロの視線は、ふたりのあいだの海で小刻みにゆれながら弧を描いている浮子綱（あばづな）に釘づけになっていた。三日月状にかこまれた水域にじっと眼を凝らし、自分の思い違いであることを示すきざしを捜している—うねる波のなかをすばやく動く影、水面が割れる銀色のゆらめきを。

(マーク・ミルズ『アマガンセット』ヴレッジ・ブックス)

(14) 外的焦点化の物語言説の例

エプロ峡谷の向うの山々は長くて白かった。こちら側は日陰もなく、木立もなく、駅が二本の線路のあいだに日を浴びていた。駅の横にぴったりくっついて駅舎が暑そうな影をつくり、酒場の開けはなした入り口には、蠅をふせぐために竹を数珠つなぎにしたカーテンがぶらさがっていた。アメリカ人と連れれの女が、駅舎の外の日陰のテーブルに腰をおろ

した。ひどく暑かった。パルセロナ発の急行は、あと 40 分で着くはずだった。急行は、この接続駅で 2 分間停車し、それからマドリッドへ行くのであった。

「何を飲もうかしら」女がたずねた。帽子をぬいでテーブルの上においた。

「ばかに暑いな」男が言った。

「ビールにしましょうよ」

「ビールを二つ」男がカーテンの奥に声をかけた。

「大きいほうですか」酒場の女が戸口からきいた。

「そう、大きいのを二つ」

酒場の女がコップに入れたビールを二杯とフェルトのコップ敷きを二枚もってきた。フェルトのコップ敷きとビールのコップをテーブルにおいて、男と女を見た。

(E.ヘミングウェイ「白い象のような山々」、『女のいない男たち』)

6. Declerck の時制論

[1] Declerck, Renaat, *Tense in English : Its Structure and Use in Discourse*, Routledge, 1991.

[2] Declerck, Renaat, *The Grammar of the English Verb Phrase, Vol. 1 : The Grammar of the English Tense System*, Mouton de Gruyter, 2006.

[3] レナート・デクラーク『現代英文法総覧』開拓社、1994. (*A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, Kaitakusha, 1991 の邦訳)

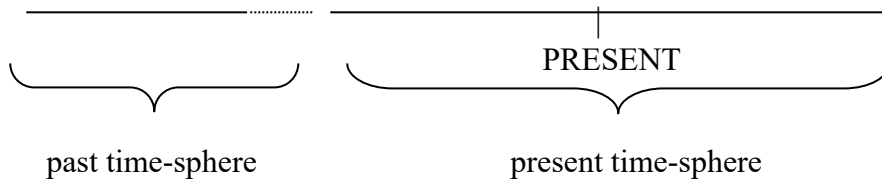
(1) 様々な時制の用法を考察してみると、話し手は、時間というものを、二つの時間領域 (time-sphere) に分けられるものとしてとらえていることがわかる。すなわち、過去時領域 (past time-sphere) と現在時領域 (present time-sphere) である。(デクラーク 1994 : 118)

【考察】

われわれはふつう時間を意識するとき、過去・現在・未来の三つに分ける。しかし言語形式によって表現されたものとしては、過去時領域と現在時領域の二つしかないとデクラークは考えている。現代英語は固有の未来形の活用を持たず、助動詞 *will* を用いた迂言形式 (periphrase) を用いるので、確かに英語については未来時領域を表す固有の形式はないと言えるかもしれない。しかし、フランス語には動詞の語尾活用による未来形があるので同じことが言えるのだろうか。

(2) 過去時領域は、完全に発話時以前にあるものとしてとらえられる時間領域である。現在時領域は、発話時を含む時間領域であるが、これは、発話時を境として、現在前時領域 (pre-present sector) (現在時領域の一部であるが、発話時より前の部分)、現在時領域 (present sector) (現在時領域の一部で、発話時を取り巻いている部分)、現在後時領域 (post-present sector) (現在時領域の一部で、発話時に続く部分) の三つの部分に分けられる。

(Ibid.)



(Declerck 2006 : 149)

【解説】

i) 現在前時領域を表すには現在完了形を用いるとされている。現在完了形は、過去の出来事よりも発話時における世界の状態を問題にするからである。

a. I *have seen* her a couple of times when we were both waiting for the bus.

b. I *have always known* that you {loved / love} me.

ii) 現在時領域を表すのは現在形だとされている。

c. Here *comes* the winner! [運動動詞の倒置構文]

d. It's *drizzling*. [運動動詞の現在進行形]

e. I *like* every kind of perfume. [心理動詞の現在形]

d.のような現在進行形は、進行形をアスペクトとみなす Declerck の立場からは現在形とされることになる。

iii) 現在後時領域は未来の領域であり、未来形によって表される。

【疑問】

Declerck の図式では、現在時領域はさらに細かく三つの区分に分かれているが、過去時領域は単一であるため、両者の対称性が失われている。過去時領域も過去前時領域 (pre-past sector)、過去時領域、過去後時領域 (post-past sector) に分けたほうがよいのではないだろうか。そうすれば次の平行性を表すことができる。

f. I *have not yet finished* my work. (現在前時領域)

→ I *had not yet finished* my work. (過去後時領域)

g. John *will come* later on. (現在後時領域)

→ John *would come* later on. (過去後時領域)

(3) 典型的に過去時領域に属する場面を表す時制を、過去 (時領域) 時制 (past (time-sphere) tenses) と呼ぶ。これには、過去時制、過去完了、条件時制*、条件完了**の四つがある。

これら以外の四つの時制は、典型的に現在時領域に属する場面を表す時制である。これを現在 (時領域) 時制 (present (time-sphere) tenses) と呼ぶ。これには、現在時制、現在完了、未来時制、未来完了がある。 (デクラーク 1994 : 118)

*条件時制 : would + 原形 (He would come back soon.)

**条件完了 : would have + 過去分詞 (He would have written the letter.)

(4) 時間の支配領域と時間的従属

複文や談話の流れの中においては、複数の異なった節の表す場面と場面の間に、時間の依存関係がみられる。こういう場合、時間の支配領域 (temporal domain) ということが問題に

なってくる。次の具体例を見てみよう。

Jim *said* that he *was pleased* that Bill *had sent* him a letter and that he *would write* a reply as soon as possible.

(ビルが手紙をくれたのが嬉しくて、できるだけ早く返事を書くとジムは言った。)

この例では、「時間の支配領域」、すなわち、過去時領域内にあって、描かれている四つの場面の時間から成る時間的範囲が問題とされている。この支配領域は、最上位の動詞の過去形 *said* によって定められている。(…)

ある場面が、もう一つ別の場面に先行するか、同時的であるか、後行するか、という観点からとらえられている場合、前者は後者に時間的に従属している (*temporally subordinated to*)、あるいは、時間的に束縛されている (*temporally bound by*) という。(…)

時間の支配領域を定める場面を、その支配領域の中心場面 (*central situation*) と呼ぶ。中心場面は、その支配領域内で、唯一、別の場面に時間的に従属していない場面である。

(デクラーク 1994 : 119)

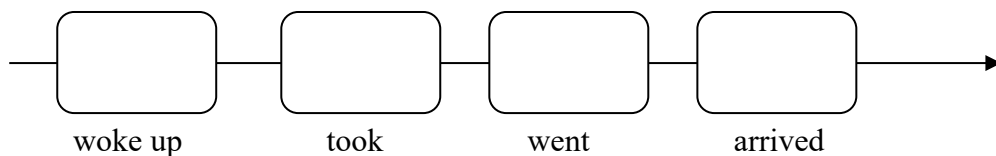
【考察】

Declerck の時制論の核心をなす概念が、中心場面 (*central situation*)、支配領域 (*temporal domain*)、時間的従属 (*temporal subordination*) である。この概念が組み込まれているために、Declerck の時制論は「談話的」たりえている。

語りなどで運動動詞の過去形が連続して表れる場合、中心場面は次々と移っていく。

a. Bill *woke up* at 7. He *took* breakfast in a hurry and *went* out. He *arrived* at the office at 8.

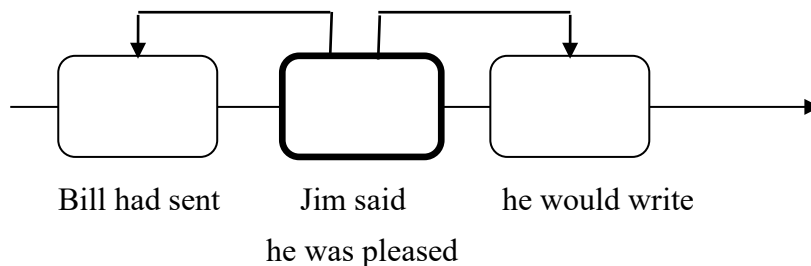
ビルは7時に起きた。急いで朝食をとると彼は家を出た。職場に8時に着いた。



この場合、どの場面も他の場面に従属しておらず、時間的従属関係はない。左から右へと次々とコマが映写されていく。中心場面は Cutrer のメンタル・スペースによる時制論では、FOCUS と EVENT が置かれているスペースに相当する。

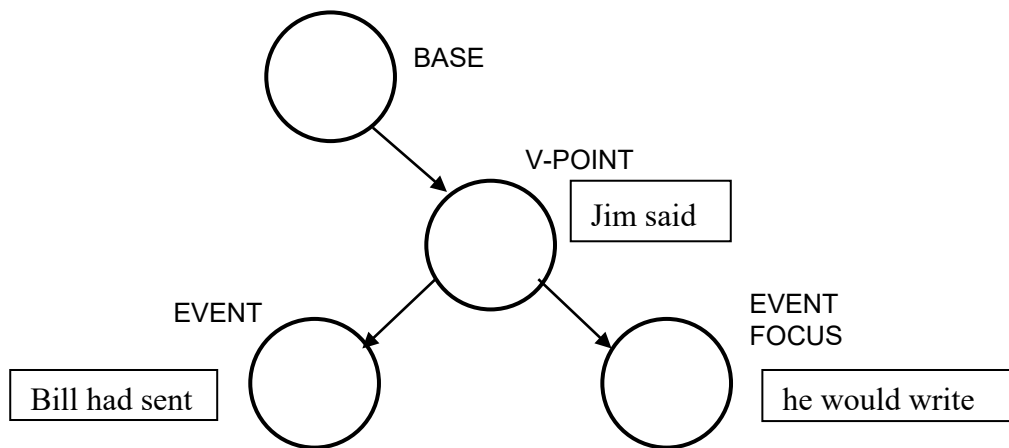
b. Jim *said* that he *was pleased* that Bill *had sent* him a letter and that he *would write* a reply as soon as possible.

ビルが手紙をくれたのが嬉しくて、できるだけ早く返事を書くとジムは言った。



この例では a.とは異なり時間的従属が起きている。太い枠の *Jim said* が中心場面となり、*Bill had sent* は中心場面から過去を振り返る形で、*he would write* は中心場面から未来を眺

める形で表されている。Cuter の表示方法で表示すると次のようになると思われる。



Jim said が書き込まれるスペースは、まず [EVENT, FOCUS]となり、he was pleased で [V-POINT]がそこへ移動する。Bill had sent のスペースが次に[EVENT, FOCUS]となり、he would write で FOCUS が移動する。このスペース構成のあいだ、Jim said のスペースはずっと V-POINT であるが、FOCUS は他のスペースへと移動している。つまり、a.のように従属が起きていないときは視点移動はないので、中心場面は [EVENT, FOCUS] なのだが、b.のように従属が起きているときは視点移動があるため、中心場面は[V-POINT] だということになる。やや一貫性を欠くと言えるだろう。

(5) 絶対時制、相対時制

時間の支配領域を定める時制（すなわち、その領域の中心場面を示す時制）を、絶対時制 (absolute tense)という。英語には絶対時制が四つある。すなわち、過去時制、現在完了、現在時制、未来時制である。(…)絶対時制は、場面を、別の場面ではなく、直接発話時に結びつけるという特徴がある。

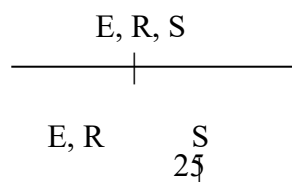
時間の支配領域を定めるのではなく、もっぱら、ある場面を別の場面に結びつけるために用いられる時制を、相対時制 (relative tense) という。上の例文には相対時制が三つ含まれている。すなわち、was（同時性を表している）、had sent（先行性を表している）、would write（後行性を表している）である。（デクラーク 1994 : 119）

【考察】

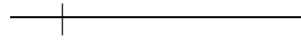
絶対時制・相対時制という用語は古く、Girard, Abbé, *Vrais principes de la langue française*, 1747 にまでさかのぼるという。しかし、近年、これに代わって直示的時制 (deictic tense)、照応的時制 (anaphoric tense) という用語も用いられるようになった。きっかけは Partee, Barbara, “Nominal and temporal anaphora”, *Linguistics and Philosophy*, 7, 1984, と Kamp & Rohrer (1983) である。上の引用で Declerck は絶対時制は四つあるとして名前をあげているが、相対時制については例示に留め、いくつあるかは言葉を濁している。実はここがミソなのである。ふたたび Reichenbach のシステムを用いて考えると次のようになる。

A. 絶対時制

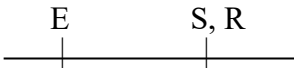
i) 現在形 : E, R, S



ii) 過去形 : E, R—S



iii) 現在完了形 : E—R, S



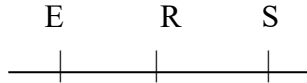
iv) 未来形 :

R, S—E または S—R, E

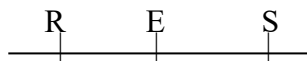


B. 相対時制

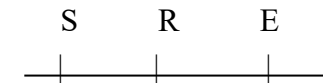
v) 過去完了形 : E—R—S



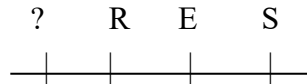
vi) 過去未来形 : R—E—S



vii) 未来完了形 : S—E—R



viii) 過去未来完了形 : ?—R—E—S



S, R, E の分布を見ると、相対時制では三つの時点が重なり合わず、別々の位置に割り振られていることがわかる。これが相対時制の定義である。一方、絶対時制を見ると 2 種類のケースがある。S と R が重なっている時制（現在形と現在完了形と未来形の一つ）、S と R が重なっていない時制（過去形と未来形の一つ）である。そもそも絶対時制とは出来事を発話時現在に結びつけて定位する時制なので、S が R として働いているはずである。

Lorsqu'ils représentent le temps de l'événement par la seule comparaison avec celui où l'on parle ils sont *Temps absolus* ; lorsqu'ils le représentent par une double comparaison, non seulement avec le temps de la parole, mais avec celui de quelque autre événement, ils sont *Temps relatifs*.

(Girard, Abbé, *Vrais principes de la langue française*, 1747)

(時制が) 出来事の時点が発話している時点との対比だけに基づいて表すとき、その時制は絶対時制である。出来事の時点が発話時点との比較だけでなく、何か他の出来事の時点との二重の対比によって表すとき、その時制は相対時制という。

つまり絶対時制とは S (=R) と E の 2 項間の関係によって表される時制にほかならない。未来形の一つを除外すると、この条件を満たしていないのが過去形である (E, R—S)。この事実は、〈過去形を E, R—S と表すやり方がまちがいでないか〉という疑問を提起する。ちなみに過去進行形は相対時制であり、E, R—S という表現が適切である。

John was making [E] coffee when Mary entered [R] the kitchen .

(6) 支配領域の転換 (shift of domain)

談話の流れの中においては、新しい節を導入する場合、その節が表す場面を、すでに定められている時間の支配領域に組み込むのか、あるいは、その節によって新しい時間の支配領域を定めるのか、話し手は、その都度、決めなければならない（後者の場合、支配領域の転換 (shift of domain) ということが問題となってくる）。次の例を見てみよう。

(1) a. I left while Bill was sleeping and Mary was having a bath.

(私はビルが寝ていて、メアリーが風呂に入っている間に立ち去った。)

- b. Suddenly the phone rang. Jill stood up from her chair, went over to the telephone and picked up the receiver.

(突然、電話が鳴った。ジルは椅子から立ち上がると、電話のところにいき、受話器を取った。)

(1a)においては、三つの場面がすべて同時的である。すなわち、**left** は過去時領域を定める絶対時制であり、あとの二つの過去形は、それぞれの場面が中心場面と同時的であることを示す相対時制である。(このように、過去形は、絶対時制としても、相対時制としても用いることができる) こうして三つの場面は、同じ時間の支配領域に位置づけられることになる。(1b)では、いくつかの場面が時間的に連続して生じているが、時制によって場面相互の依存関係を示すことはしていない。具体的にいうと、話し手は、先行性を示す相対時制(すなわち、過去完了形)や後行性を示す相対時制(すなわち、条件時制)を用いることはせず、どの節にも絶対時制を用いている。したがって、新しい節ごとに支配領域が転換されている。(言い換えれば、節ごとに新しい支配領域が定められているのである)

- (2) a. I knew Bill had been in Yugoslavia before. He had been there when he was still a child.

(ビルが以前にユーゴスラビアにいたことを私は知っていた。彼は子供の時にそこにいたのだった。)

- b. I knew Bill had been in Yugoslavia before. He went there when he was still a child.

(ビルが以前にユーゴスラビアにいたことを私は知っていた。彼はまだ子供の時にそこに行った。)

(2a)においては、**had been** を含む二つの場面は、ともに **knew** が表す場面によって時間的に束縛されている。さらにいうなら、三つの節は、すべて同じ時間の支配領域に属している。これに対して、(2b)では、**went** が絶対時制であり、領域を転換している。

(デクラーク 1994 : 120)

(7) 過去時領域内で支配領域の転換が行われた場合(例えば、(2b)のような場合)、時制そのものは、二つの支配領域の時間的依存関係を示さない。そのため、過去時領域内で支配領域の転換が行われた場合には、時を表す副詞的修飾語句、叙述する順序、文脈、あるいは語用論的知識 (**pragmatic knowledge**) (すなわち、現実世界について我々がもっている一般的知識) などによって、場面相互の時間的順序関係がわかるようにしなければならない。

- (3) a. The soldier got seriously wounded. He died shortly afterwards.

(兵士は深手を負った。彼は間もなく死んだ。)

- b. The soldier got seriously wounded. He would die shortly afterwards.

(兵士は深手を負った。彼は間もなく死ぬことになる。)

(3a) では、時間の支配領域が転換されているが、時の副詞的修飾語句 **shortly afterwards** によって、**died** の表す場面を前文が表す場面のあとに位置づけている。しかし、時制形式そのもの (**got wounded, died**) からは、一つ目の領域が最初の領域に後行するという情報は得られない。時制が与えている情報は、その二つの領域が過去時領域に属しているということだけである。(3b) では、二つの節が同じ領域に属している。あとの節が表している場面

が前の節の表している場面に後行するという情報は、今度は、時の副詞的修飾語句 *shortly afterwards* と時制形式 *would die* によって与えられている。

類例：

- (4) a. In that year Gandhi *died*. He *had been* a popular hero, who *had made* an invaluable contribution to the creation of modern India.

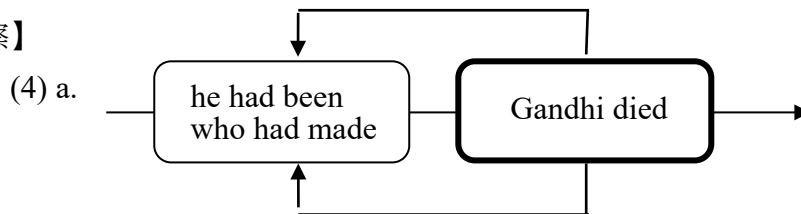
(その年にガンジーは亡くなった。[それまで] 彼は国民的英雄であり、[亡くなるまでに] 近代インドの成立に計り知れない貢献をしていた。)

- b. In that year Gandhi *died*. He *had been* a popular hero, who *made* an invaluable contribution to the creation of modern India.

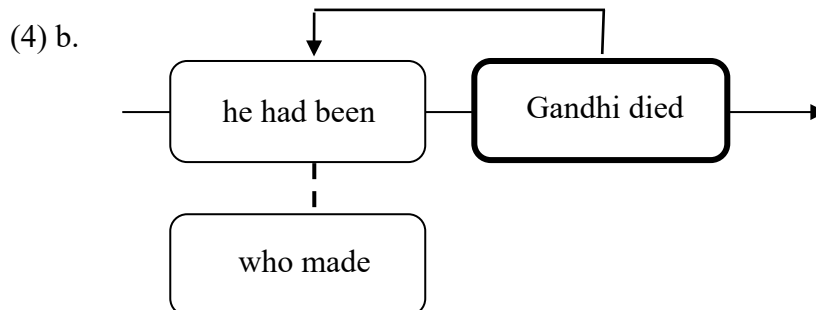
(その年にガンジーは亡くなった。彼は国民的英雄であり、近代インドの成立に計り知れない貢献をした。)

(デクラーク 1994 : 121)

【考察】



(4) a. では中心場面による時間的従属が二度起きている。*he had been* と *who had made* はそれぞれ独立に中心場面 *Gandhi died* に従属している。



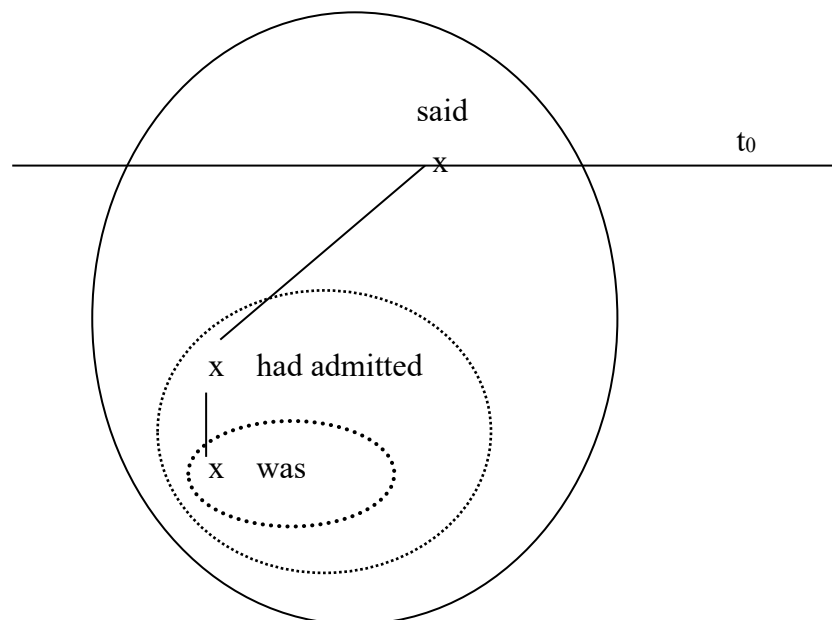
(4) b. では、*he had been* が中心場面 *Gandhi died* にたいして従属しており、これは(4) a. と同じである。ところが *who made* は中心場面 *Gandhi died* にたいして従属しているのではない。*he had been* の場面との同時性を表わす相対時制だというのがデクラークの考えである。過去完了形は過去の過去を表すので、一見すると *he had been* が *who made* より過去に見えてしまうが、その解釈がまちがいであることに注意しよう。

(8) 絶対過去時制と相対過去時制

In section 8.12 we have claimed that English has two past tenses, i. e. two tenses which use the same past tense morphology and are therefore formally indistinguishable, but which differ in their semantics (temporal structure). An ABSOLUTE PAST TENSE establishes T-Simultaneity in such a past domain. In other words, the semantics of the absolute preterite is : “The situation time is located in the past time-sphere (definite relative to t_0 ”, while the semantics of the relative preterite is : “The situation time is T-simultaneous with an orientation time in a past domain or subdomain”. (A subdomain is a domain — i. e. a set of one or more times — whose “central orientation time” is

not directly related to t_0 but is a situation time or other orientation time “deeper down” in a temporal domain. For example, *He said that he had admitted that he was sick* involves a temporal domain (whose central orientation time is the situation time of *said*), which itself involves a subdomain (whose central orientation time is the situation time of *had admitted*), which itself involves a subdomain whose central orientation time is the situation time of *was*.

(Declerck 2006 : 383)



8.12 節で、英語には二系統の過去時制があると述べた。この二系統の過去時制は、同じ形態を持つため形の上では区別がつかないが、表す意味、つまり時間の構成が異なる。絶対過去時制は過去時領域の中に領域を設定するが、相対過去時制は他の過去時領域との同時性を表す。別な言い方をすれば、絶対過去形が表すのは「出来事時は、発話時現在との関係で設定された過去時領域に定位される」ということで、相対過去形が表すのは「出来事時は、過去領域または過去サブ領域にある基準時と同時的である」ということになる。（サブ領域とは、ひとつまたは複数の時点からなる小さな領域で、その中心的な基準時が t_0 に直接関係するのではなく、領域内の「より深い」出来事時や基準時に関係づけられているものである。たとえば、*He said that he had admitted that he was sick*. 「彼は自分が病気だったことを認めたと言った」では、まず *said* が中心的基準時となる領域が設定され、さらにその下に *had admitted* を基準時とするサブ領域が作られ、次に *was* を出来事時とするサブ領域ができる。）

(9) 相対過去時制が存在する根拠 (1)

過去時領域と現在後時領域には次のような平行性が観察できる。

a. *John felt unhappy when he was alone.*

ジョンは一人ぼっちの時に悲しいと感じた。

b. *John will be unhappy when he { is / *will be } alone.*

ジョンは一人ぼっちになった時に悲しいと感じることだろう。

上の b. で *will be* は絶対時制で現在後時領域に出来事時を設定する。*when* 節のなかで再び絶対時制 *will be* を用いることはできない。*is* が相対時制であることは、*is* が発話時現在ではなく、*will be* との同時性を表すことから明らかである。a. を見ると、*was* は絶対時制の *felt* との同時性を表しているから、*was* もまた相対時制と見なすべきである。

(10) 相対過去時制が存在する根拠 (2)

次のように未来の出来事を表す過去形の用法がある。

- a. Mary *told* me on the phone last night that at the dinner party tomorrow she *would* suddenly say that she *felt* sick.

明日の夕食会で突然気分が悪いと言うだろうとメアリーは昨夜電話で私に言った。

- b. [A few weeks ago he told us about what he planned to do.] When he *was* fifty-five he *would* retire.

[数週間前に彼は計画していることを私たちに話した。] 55 歳になったら退職しようというのだ。

a. の *felt*、b. の *was* は発話時現在よりも未来に位置する出来事を表している。もし英語にはひとつしか過去形がなく、発話時現在よりも過去の出来事を表すと考えたと、この現象を説明することができない。

(11) 相対過去時制が存在する根拠 (3)

- a. John *addressed* the girl who *was sitting* behind the largest desk.

ジョンが一番大きなデスクに坐っている女性に話しかけた。

- b. [Bill said yesterday that] John *had addressed* the girl who *was sitting* behind the largest desk.

ジョンが一番大きなデスクに坐っている女性に話しかけたと [昨日ビルは言った]。

間接話法 (represented speech) では絶対時制は過去方向に後方転移 (backshift) する。a. の過去形 *addressed* は b. では過去完了形 *had addressed* になる。絶対時制は発話時現在 t_0 を基準として定義される時制なので後方転移を起こす。ところが相対時制 (*was sitting*) は後方転移を起こさない。相対時制は *temporal domain* の中心時点との同時性を表し、発話時現在とはつながりがないからである。

(12) 疑問

上の (1) (2) (3) は従属節における時制の一致に関する現象である。(1) は、時制の一致は過去方向には起きるが、未来方向には起きないことを示す。(2) は未来を表す過去時制、(3) は相対時制は後方転移を起こさないことを示している。これらはすべて従属節における時制の一致の問題であり、時制の一致に関する規則を定めておけば、絶対過去時制と相対過去時制をわざわざ区別する必要はないのではないかと考えられる。

7. 二つの zone 理論

これから述べるフランス語時制の二つの zone 理論の詳しいことについては、以下の文献を参照されたい。

東郷雄二 (2007) 「Je t'attendais 型半過去再考」『フランス語学研究』41, 1-15. 日本フランス語学会.

東郷雄二 (2008) 「半過去の照応的性格—連想照応と不完全定名詞句の意味解釈から」『フランス語学研究』42, 17-30. 日本フランス語学会.

東郷雄二 (2010) 「談話情報管理から見た時制—単純過去と半過去」『フランス語学研究』

44, 15-32. 日本フランス語学会.

東郷雄二 (2012)「時制と談話構造—同時性を表さない半過去再考」『フランス語学研究』
46, 37-56. 日本フランス語学会.

東郷雄二 (2014)「半過去を支える解釈領域 — 視野狭窄の半過去を中心に」『フランス
語学研究』48, 51-67. 日本フランス語学会.

東郷雄二 (2014)「半過去形の叙想的テンス用法」、春木仁孝・東郷雄二編『フランス語
学の最前線 2』、ひつじ書房

(1) フランス語の直説法の時制の全体像は次の図式で表すことができる。

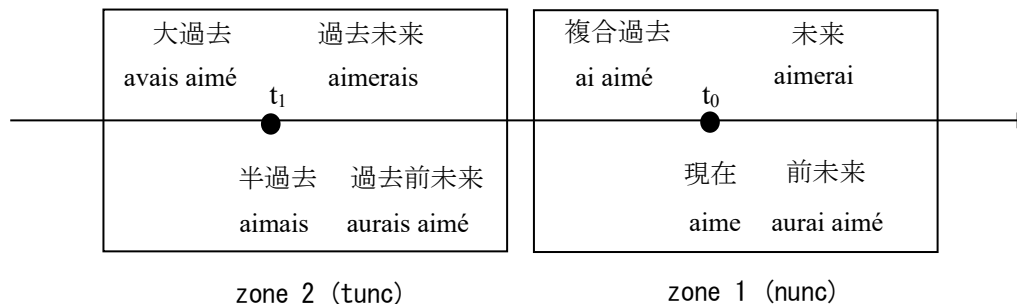


図 1 フランス語時制の全体像

フランス語の具体的な時制の特徴については、次の点に注意が必要である。

- a. フランス語の現在形は英語の現在形と現在進行形の両方に対応する。
ex. Jean *lit* un livre. → John *reads* a book. / John *is reading* a book.
ジャンは本を読む / 読んでいる。
- b. フランス語の未来形は動詞の語尾活用によって示される。
ex. Jean *prendrai* un train. [John will take a train.]
ジャンは列車に乗るだろう。
- c. 複合過去形は助動詞 avoir [have]+過去分詞で作る。もともとは英語のように現在完了を表していたが、単純過去形の衰退により、単なる過去も表すようになった。
 - i) Jean *a* toujours *été* gentil avec moi. [John has always been kind to me.]
ジャンはずっと私に親切にしてくれている。[現在完了]
 - ii) Jean *a* *lu* ce livre hier. [John read this book yesterday.]
ジャンはこの本を昨日読んだ。[過去]
- d. 前未来形は助動詞 avoir [have]の未来形+過去分詞で作る。未来完了に相当する。
ex. Jean *aura* *lu* ce livre avant midi. [John will have read this book by noon.]
ジャンはこの本を正午までに読んでしまうだろう。
- e. 半過去形は未完了時制で、過去の動作の継続・習慣を表す。
 - i) Jean *faisait* du café quand Marie entra. [John was making coffee when Mary entered.]
マリーが入って行った時、ジャンはコーヒーを淹れていた。

ii) Jean *faisait* de la pêche tous les dimanches. [John used to do fishing every Sunday.]

ジャンは毎週日曜に釣りをしていた。

f. 大過去形はほぼ英語の過去完了形に相当する。

ex. La course *avait commencé* quand Jean arriva.

[The race had started when John arrived.]

ジャンが到着した時、レースはもう始まっていた。

g. 過去未来と過去前未来は英語の would＋原形、would have＋過去分詞に当たる。

i) Jean dit qu'il *ferait* la vaisselle après.

[John said that he would do the dishes later on.]

ジャンは後で皿洗いをすると行った。

ii) Jean dit qu'il *aurait fini* ce travail avant midi.

[John said that he would have finished this work by noon.]

ジャンはこの仕事は正午までに済ませると行った。

h. フランス語にはこれ以外に単純過去形と前過去形があるが、このふたつは上の図式に入らない。

i) Jeanne d'Arc *naquit* à Donremy en 1412.

[J. d'Arc was born in Donremy in 1412.]

ジャンヌ・ダルクは 1412 年にドンレミィで生まれた。

ii) Après qu'il *eut prononcé* ces paroles, il s'éloigna.

[After having pronounced these words, he went away.]

彼はこう言うと言ち去った。

i. zone 1 の中にある複合過去は現在完了の意味で用いられた複合過去である。

i) Je n'*ai pas encore lu* ce livre. [I have not yet read this book.]

私はこの本をまだ読んでいない。

語りなどで単純過去の代わりに用いられた複合過去は上の図式に入らない。

ii) Jeanne d'Arc *est née* à Donremy en 1412. [J. d'Arc was born in Donremy in 1412.]

ジャンヌ・ダルクは 1412 年にドンレミィで生まれた。

(2) 図 1 は次のような意味を表している

(A) zone 1 は発話時現在 t_0 を中心とする時制であり、話し手が t_0 に視点を置いて捉えた事態を表す。zone 2 は過去のある時点 t_1 を中心とする時制であり、過去への視点移動を伴う用法においては、 t_1 に視点を置いて捉えた事態を表す。ただし視点移動を伴わない用法においてはこの限りではない。

(B) 時制を考える場合、過去・現在・未来の 3 分法を用いることが多いが、フランス語では未来は独自の zone を形成しない。未来は現在に置かれた視点に従属する。

(C) zone 1 を時間軸に沿って過去に移動させると zone 2 を得る。つまり zone 2 とは、過去にずらされた zone 1 である。両者を重ねたときに重なる時制が、従属節における時制の一致を起こす時制である。すなわち時制の一致とは zone 1 から zone 2 への全面的な視点の移動に他ならない。

(D) zone 1 と zone 2 とは断絶している。その断絶の内実は事態そのものの不連続性であることも（例 i)）、話し手による事態認識の不連続性であることもある（例 ii)）。

i) Son mari *était* musicien, mais il ne l'est plus.

[Her husband *was* a musician, but he is no more so.]

彼女の夫はミュージシャンだったが、今ではもうそうではない。

→「音楽家であること」が現在では成立しない（事態の不連続）

ii) Ah, vous *étiez* là. [Oh, you *were* there.]

ああ、あなたはそこにいたのですか。

→「あなたがそこにいる」という事態は連続している。話し手がそのことに気づいていなかった過去と、気づいた今とが不連続である（事態認識の不連続）

この断絶こそが連続的な時間を現在と過去のふたつの zone に分割する要因である。断絶がなければ、過去と現在は次の例のようにひと続きの連続したものとして zone 1 の時制を用いて表現される。

iii) Vous *avez* toujours *été* gentil avec moi. [You *have* always *been* kind to me.]

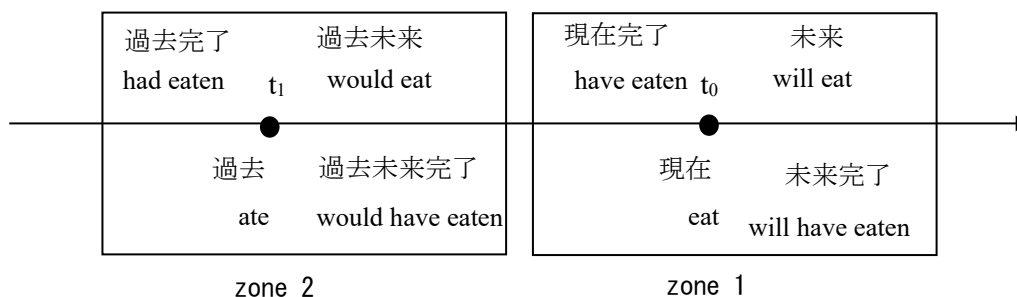
あなたはずっと私に親切にしてくれている。

iv) Marie *vit* à Rome depuis 3 ans. [Mary *has* lived in Roma for 3 years.]

マリーは3年前からローマに住んでいる。

(2) 英語時制の全体像

ふたつのゾーン理論を英語に適用するとどうなるかを考えてみる。まず単純に英語に置き換えると次のようになる。



a. zone 1 は Declerck の現在時領域 (present time-sphere)に、zone 2 は過去時領域 (past time-sphere)に相当する。

b. フランス語との大きなちがいは、zone 1 の中核時制が現在形で、zone 2 の中核時制が過去形だという点である。英語で運動動詞の現在時制は発話時現在の出来事を表さない。

i) He *runs* (every day).

一方、フランス語の現在形は発話時現在の出来事を表す。

ii) Il *court* (maintenant). [He *is* running (now).]

彼は（今）走っている。

発話時現在の出来事を表すには現在進行形を用いる。この意味で、運動動詞の現在形は、今起きつつあることを表す未完了時制とは見なせない。同様に英語の運動動詞の過去形は出来事の開始から終了までを表し、これも未完了時制ではない。

iii) He *ran* ten miles in an hour yesterday.

彼は昨日 10 マイルを 1 時間で走った。

(3) 完了 (perfective) アスペクト・未完了 (imperfective) アスペクトと視点

完了アスペクトとは、事態の開始点から終了点までの全体を表すものをいう。



i) John *ran* ten miles in an hour.

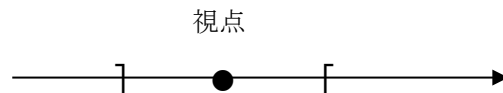
ジョンは 10 マイルを 1 時間で走った。

ii) John *ran* { *since 9 o'clock / *for two hours }.

ジョンは { *9 時から / *2 時間 } 走った。

ある事態を完了したものと把握するためには、その事態を眺める視点(もしくは基準点)が事態の終了点よりも右側(つまり終了後)になくなくてはならない。

未完了アスペクトは、事態の開始点や終了点を考慮せず、事態を進行中・展開中のものとして表す。



iii) John *was running* { since 9 o'clock / when I saw him }.

ジョンは { 9 時から / 私が彼を見た時 } 走っていた。

iv) John *was running* { *ten miles in an hour }.

ジョンは { *10 マイルを 1 時間で } 走っていた。

ある事態を未完了として把握するためには、その事態を眺める視点が事態の内部になくなくてはならない。これを「内的視点」という。

状態動詞 (be, live, etc.) や心理・感情動詞 (like, hate, etc.) や知的活動動詞 (think, know, etc.) を除いて運動動詞 (≡ activity, accomplishment) だけを考えると、英語で未完了を表すのは現在進行形と過去進行形だけで、フランス語で未完了を表すのは現在形と半過去形だけである。

(4) 仮説

視点中心を表すことができるのは未完了時制に限られる。ここで視点中心というのは、話し手がある時点 t_1 、もしくは t_1 に生じた出来事の場面に、想像上で移動し(ワープして)、その地点に視点を置いて目の前で起きている出来事、それより以前に起きた出来事、それ以後に起きるであろう出来事を眺めて把握する、そのような認知上の抽象的地点である。

(5) この視点中心は、Declerck の Vandage Time によく似ている。

I was reading a book.

私は本を読んでいた。

Since then I've been working hard on my dissertation.

それから私はずっと論文にかかりきりだ。

This time tomorrow I'll be flying to Morocco.

今度は明日モロッコに飛行機で行く。

I'm still studying the case.

私はまだその件を調査中だ。

As is clear from these examples, it is irrelevant whether the speaker views the situation as past, pre-present, present or future. What matters is that he presents a view of the situation as if from within the situation, that is, from within the interval during which the whole situation takes place. In other words, progressive aspect requires that the speaker assumes a 'VANDAGE TIME' from which he views the situation as in progress ('ongoing').

(Declerck, Renaat, *The Grammar of the English Verb Phrase, Vol. 1 : The Grammar of the English Tense System*, Mouton de Gruyter, 2006, p.33)

これらの例から明らかなように、話し手が事態を過去と見るか、あるいは前現在・現在・未来と見るかは関係ない。重要なのは話し手が事態をあたかも内部から眺めているかのように表していることである。つまり事態全体が生起している時間インターバルの内部から見ているということである。言葉をかえれば、進行相では話し手は「視点時」を採用するのであり、視点時から事態を進行中のものとして眺めるのである。

(6) フランス語の *maintenant* 「今・今や」は現在形と半過去形、および現在完了の意味の複合過去形でしか用いることができない。これは視点を移動することができる先は、「第二の発話時現在」であることを示している。

a. *Jean court maintenant*. 「今、ジャンは走っている」(視点は t_0)

b. *Jean courait maintenant*. 「今やジャンは走っていた」(視点は t_1)

c. **Jean courut maintenant*. 「今やジャンは走った」

d. *Jean a couru maintenant*. 「今やジャンは走り終えた」(視点は t_0)

(7) a. *John is running now*. (視点は t_0)

ジョンは今走っている。

b. *John was running now*. (視点は t_1)

ジョンは今や走っていた。

b. **John ran now*.

ジョンは今走った。

c. *John has run (ten miles) now*. (視点は t_0)

ジョンは今や(10 マイルを)走り終えた。

N. B. ただし、状態変化動詞 (become) などの achievement 動詞では now と過去形とが共起する場合がある。また ii) のように now が物語の「今」を表すこともある。

i) *The reason now became clear*.

その理由は今や明らかになった。

ii) *Now he pulled out a revolver from his pocket*.

彼は今ポケットからリボルバーを取り出した。

(8) 視点仮説 (4) について

なぜ未完了時制しか視点を表すことができないのだろうか。完了時制は、たとえ事態の開始点と終了点の間に相当の時間が流れたとしても、それを圧縮して点的に表現する。

i) It *rained* all night.

ひと晩中雨が降った。

ii) Il *plut* / *a plu* toute la nuit.

ひと晩中雨が降った。

内的視点を取ろうとしたら、開始点と終了点の間に入り込まなくてはならないが、完了時制は事態を点的に表現しているのでそれができない。

一方、未完了時制は開始点と終了点を示すことなく、事態を進行中の相で捉えるので、内部に入り込んで内的視点を取ることができる。

i) Peter went out. It *was raining*.

ピーターは外出した。雨が降っていた。

ii) Pierre sorta. Il *pleuvait*.

ピエールは外出した。雨が降っていた。

(9) zone の中核時制に関する仮説

時制組織を構成する zone (Declerck の用語では time-sphere) の中核時制は、そこから過去や未来の出来事を眺めて把握する地点なので、未完了時制でなくてはならない。フランス語では zone 1 の中核時制は現在形で、zone 2 の中核時制は半過去形であり、この仮説に合致した構成となっている。

(10) 英語の中核時制は何か？

英語時制の全体像 (2) を見ると、zone 1 の中核時制は現在形、zone 2 は過去形である。上に述べたように、現在形も過去形も未完了時制ではない。したがって英語では中核時制に視点を置くことができないことになってしまう。

N. B. Declerck の時制論には「zone の中核時制」という概念はない。Declerck が述べているのは、「現在時領域 (present time-sphere) に属するのは、現在形、現在完了形、未来形、未来完了形の 4 つである」ということだけである。

(11) 疑問と問題提起

英語の時制組織は、フランス語のように視点中心を構成する中核時制を基礎として作られてはいないのではないか。しかしもしそうだとすると、英語では過去に視点移動するときに、何を足がかりとして移動を行なうのだろうか。

(12) 英語の小説テキストを参考にして、どのような場合に視点移動が行われているか、そのとき手がかりとなっている時制は何かを考えてみよう。

There were only two Americans stopping at the hotel. They did not know any of the people the passed on the stairs on their way to and from their room. Their room was on the second floor facing the sea. It also faced the public garden and the war monument. (...)

The American wife stood at the window looking out. Outside right under their window a cat

was crouched under one of the dripping green tables. **The cat was trying** to make herself so compact that she would not be dripped on. (E. Hemingway, *Cat in the rain*)

そのホテルにはアメリカ人は二人しか泊まっていなかった。部屋に出入りする途中、階段ですれちがうのは、みな見知らぬ人ばかりだった。その部屋は二階にあって海に面していた。それはまた公園と戦争記念碑にも面していた。(…)

アメリカ人の妻は窓辺に立って外をながめていた。その部屋のすぐ下の雨滴が垂れている賭博台の蔭に、猫が一匹うずくまっていた。猫は雨滴に当たらないように、懸命にからだを縮めていた。
(13) In the morning the sun was up and the tent was starting to get hot. Nick crawled out under the mosquito netting stretched across the mouth of the tent, to look at the morning. **The grass was wet** on his hands as he came out. He held his trousers and his shoes in his hands. **The sun was just up** over the hill. **There was the meadow**, the river and the swamp. **There were birch trees** in the green of the swamp on the other side of the river. (E. Hemingway, *Big Two-Hearted River II*)

朝になって太陽がのぼると、テントのなか暑くなってきた。ニックは朝の模様を見るためにテントの入り口の張った蚊帳をくぐって這いだした。出るときに手にズボンと靴を持っていた。太陽はちょうど丘の上に昇っていた。草原もあり川もあり沼地もあった。川向こうの草の茂った沼地には樺の木立があった。

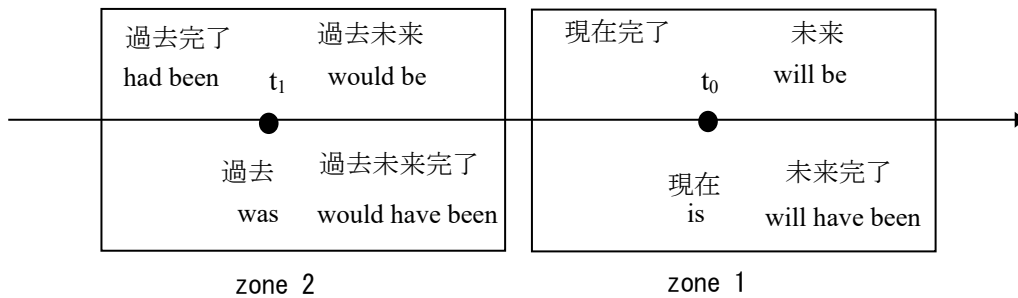
(14) The next morning I woke early, drew the curtains, and saw the breath-taking view across the valley. **The range** that had been palely visible in the moonlight **was now** a deep green meeting the blue of the sky, and beyond it were higher ranges tipped with snow. I came to know and love that view during the weeks that followed; it was the kind that had a different enchantment for every time of day and variation of weather.

翌朝早く起きて、カーテンをあけたとたん、眼前の風景に思わず息を吞んでしまった。谷をへだてた山脈は、昨夜月光に照らされていた時はぼんやりとしか見えなかったが、今はくっきりと深い緑で、それが空の青さに映え、その向こうにはさらに高い山脈が雪をいただいて幾重にも連なっている。それから数週間眺めているうちに、私はますますこの風景を深く知り、いよいよ強く愛着を覚えるに至った。時刻が移るたびごとに、あるいは天候が変わるたびごとに、さまざまな魅力を見せてくれるのである。
(安西徹雄『英文翻訳術』ちくま学芸文庫)

(14) 英語における視点移動の仮説

上のテキストを見てみると、英語で過去時領域に視点移動するときには状態動詞、なかんずく **be** 動詞が移動の足がかりとなっていることがわかる。状態動詞の過去形は、過去時 t_1 において成り立つ事態を表し、かつ未完了である。視点仮説 (4) で述べたように視点を置くことができるのは未完了時制に限られる。状態動詞の過去形はこの条件を満たしているので、視点を移動することができると考えられる。

(15) このことを踏まえて英語時制の全体像(状態動詞の場合)を次のように考えてみよう。



【視点移動のメカニズム】

(12)を例にとると、*The American wife stood at the window, looking out.* のように、登場人物を主体として知覚動詞 *look out* を用いる。知覚動詞は登場人物への焦点化を促し、また分詞 *looking out* は状態性述語でこれも視点移動の準備となる。次に *Outside right under their window a cat was crouched under one of the dripping green tables.* の *was crouched* は状態動詞なので、上の図で過去時領域 (zone 2) の中心である t_1 において成り立つ事態を表す。これを足がかりとして、それまで視点移動が感じられなかった過去時制での語りに視点移動が起きて内的描写が可能になる。上にあげた例にはないが、過去進行形も同様に視点移動の足がかりとなる。

8. 時制の一致

(1) 時制の一致は、それぞれの言語で次のように呼ばれている。

ラテン語	<i>consecutio temporum</i>
英語	<i>sequence of tenses</i>
フランス語	<i>concordance des temps</i>

(2) 複文において、主節の述語動詞が過去時制または過去完了形のときは従属節の述語動詞は普通は過去時制か、または過去完了形でなければならない。(…) このように、主節と従属節の述語動詞の間に見られる一致を *sequence of tenses* という。時制の一致は、本来従属節が名詞節の場合が主で、話法の転換において重要な規則である。主節の過去時制に従属節の述語動詞を一致させる場合には、

現在時制・未来時制 → 過去時制

現在完了形・過去時制 → 過去完了形となる。

なお主節の述語動詞の時制が、現在時制・現在完了形・未来時制・未来完了形の場合には時制の一致は起こらない。

I think it is true. → *I thought it was true.*

(私はそれが真実だと思う。→私はそれが真実だと思った。)

I think he will come. → *I thought he would come.*

(私は彼が来ると思う。→私は彼が来ると思った。)

I think he has already come back. → *I thought he had already come back.*

(私は彼がもう戻って来ていると思う。→私は彼がもう戻って来ていると思った。)

I think it was a mistake. → *I thought it had been a mistake.*

(私はそれがまちが이었다と思う。→私はそれがまちが이었다と思った。)

次の場合には主節の述語動詞が過去時制でも、時制の一致は起こらないことがある。

- a. 不変の真理、または現在に至るまで事実であることを表す場合

We learned that three times three *was* [is] nine.

(私たちは3掛ける3は9だと習った。)

He said that Mary *was* [is] going to get married next month.

(メアリーは来月結婚すると彼は言った。)

- b. 歴史上の事実を表すとき

Our teacher said King Charles I *had* his head cut off in 1649.

(チャールズ王は 1649 年に首を切られたと先生は言った。)

- c. 仮定法

He said that if he *were* in my place, he *would* do the same thing.

(もし自分が私の立場だったら、同じことをするだろうと彼は言った。)

形容詞節・副詞節においては、機械的な時制の一致はなく、意味によって時制が左右される。特に比較を表す副詞節ではそうである。

I was much stronger *then* than I *am* now.

(昔の私は今よりずっと強かった)

It was a little smaller that I *had* imagined.

(それは私が思ったより少し小さかった。)(『ライトハウス英和辞典』研究社)

- (3) 時制の一致は存在しないとする説もある

Ce n'est pas le temps principal qui amène le temps de la subordonnée, c'est le sens. Le chapitre de la concordance des temps se résume en une ligne : Il n'y en a pas.

(Brunot, Ferdinand, *La pensée et la langue*, Masson, 1922)

従属節の時制を決定するのは主節の時制ではなく意味である。(文法書の)時制の一致の章は、「存在しない」という一行で足りる。

- (4) フランス語の時制の一致

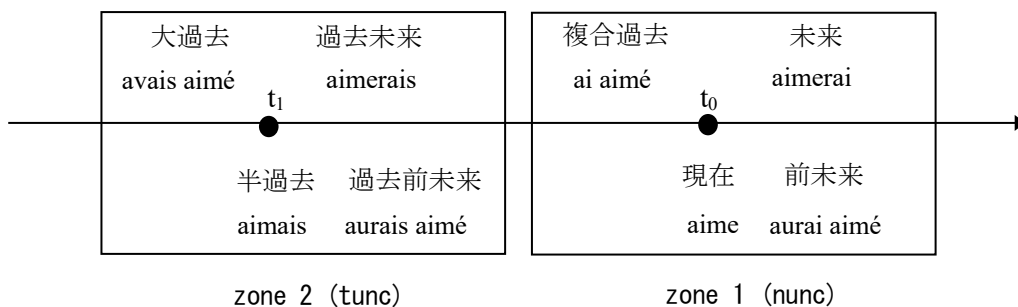


図1 フランス語時制の全体像

フランス語の時制の一致は、図1の「2つの zone」理論でうまく説明できる。zone 1 を zone 2 に重ね合わせれば一致した結果の時制が得られる。

時制の一致は次の場合にのみ起きる。

- a. 現在→半過去

i) Claire sait que la pluie *menace*. [C. knows that it's *going* to rain.]

クレールは雨が降りそうなことを知っている。

ii) Claire savait que la pluie *menaçait*. [C. knew that it *was going* to rain.]

クレールは雨が降りそうなことを知っていた。

b. 複合過去→大過去

i) Max croit que Jean *a fermé* la porte. [M. believes that J. *closed* the door.]

マックスはジャンがドアを閉めたと思っている。

ii) Max croyait que Jean *avait fermé* la porte. [M. believed that J. *had closed* the door.]

マックスはジャンがドアを閉めたと思っていた。

c. 未来→過去未来

i) Yves dit que la réunion *aura lieu* demain.

[Y. says that the meeting *will be held* tomorrow.]

イヴは明日会議があると言う。

ii) Yves a dit que la réunion *aurait lieu* le lendemain.

[Y. said that the meeting *would be held* the next day.]

イヴは明日会議があると言った。

d. 前未来→過去前未来

i) Léa me dit qu'elle *aura terminé* le livre avant le week-end.

[L. says to me that she *will have finished* the book before the weekend.]

レアは私に週末までには本を書き上げると言う。

ii) Léa m'a dit qu'elle *aurait terminé* le livre avant le week-end.

[L. said to me that she *would have finished* the book before the weekend.]

レアは私に週末までには本を書き上げると言った。

(5) 半過去形は時制の一致を起こさない。

a. Jean n'est plus le petit garçon qu'il *était* il y a dix ans.

[J. is no longer the little boy he *was* ten years ago.]

ジャンはもう 10 年前の少年ではない。

b. Jean n'était plus le garçon qu'il *était* dix ans auparavant.

[J. was no longer the little boy he *was* ten years before.] *英語では ... he had been

ジャンはもう 10 年前の少年ではなかった。

(6) 大過去形も一致を起こさない。

a. Yves sait que l'avion *était parti* avant l'arrivée de l'orage.

[Y. knows that the airplane *had departed* before the arrival of the storm.]

イヴは飛行機が嵐が来る前に出発したことを知っている。

b. Yves savait que l'avion *était parti* avant l'arrivée de l'orage.

[Y. knew that the airplane *had departed* before the the arrival of the storm.]

イヴは飛行機が嵐が来る前に出発したことを知っていた。

(7) 過去未来形も過去前未来形も一致を起こさない

a. Léa me dit qu'elle savait que Jean *quitterait* la boîte tôt ou tard.

[L. says to me that she knew that J. *would leave* the company sooner or later.]

レアはジャンがいずれ会社を辞めることを知っていたと私に言う。

b. Léa m'a dit qu'elle savait que Jean *quitterait* la boîte tôt ou tard.

[L. said to me that she knew that J. *would leave* the company sooner or later.]

レアはジャンがいずれ会社を辞めることを知っていたと私に言った。

(8) 英語の時制の一致に関する不思議

英語における時制の一致を解説している文章では、元の文が現在時制のとき、動詞は決まって状態動詞であり、最も目に付くのは **be** 動詞である。

a. "I *am* tired", she complained. → She complained that she *was* tired.

「私は疲れた」と彼女は不平を言った。→疲れたと彼女は不平を言った。

(クワーク&グリーンバウム『現代英語文法大学編』紀伊国屋書店)

b. I said that the plan *was* impracticable.

その計画は実行不可能だと私は言った。

He *had* repeatedly said that he *was* tired.

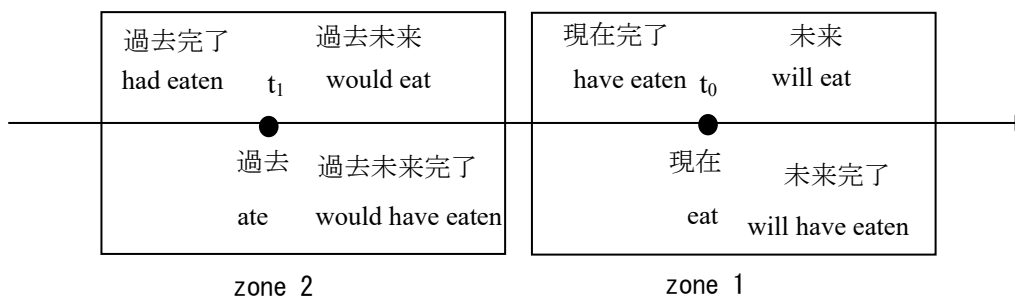
疲れたと彼は繰り返し言った。

Formerly it *was* generally believed that the earth *was* flat.

昔は一般に地球は平らだと信じられていた。

(勝又永朗『大学英文法』開文堂出版)

(9) 英語時制と時制の一致



a. I often *run* ten miles in the morning.

私はよく朝に 10 マイル走る。

→ John said that he often *ran* ten miles in the morning.

よく朝に 10 マイル走るとジョンは言った。

b. Bill *has* just arrived.

ビルは着いたところだ。

→ John said that Bill *had* just arrived.

ビルは着いたところだとジョンは言った。

c. I *will* take this train.

私はこの列車に乗る。

→ Jill said that she *would take* that train.

私はこの列車に乗るとジルは言った。

d. I *will have written* this letter by noon.

私はこの手紙を正午までに書き上げる。

→ Mary said that she *would have written* that letter by noon.

私はこの手紙を正午までに書き上げるとメアリーは言った。

ここまでは2つのゾーンの図式の通りになっている。この図式で説明できないのは過去形が過去完了形になることである。

e. I *lost* much money in the stock market.

私は株の取引で大損した。

→ Bill said that he *had lost* much money in the stock market.

株の取引で大損したとビルは言った。

ただし過去形は一致を起こさず過去形のままのこともある。

f. I *told* him that Jane was angry with you.

ジェーンが君のことを怒っていると彼に言った。

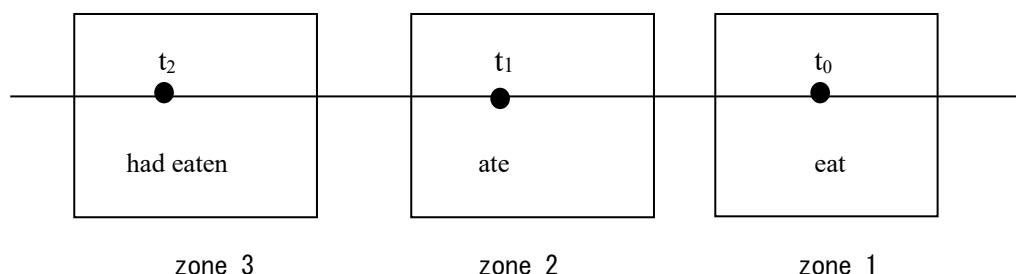
→ Jill said that she *told* Bill that Jane was angry with you.

彼女がジェーンが君のことを怒っているとビルに言ったとジルは言った。

(Declerck 2006 : 390)

(10) 解決策 (1)

過去→過去完了の一致を説明するために、zone 2 の左側に zone 3 を設定する。



この場合、zone 3 に入るのは過去完了形のみである。過去完了形は zone 2 にも入っているが、それは現在完了が一致の結果 zone 2 に置かれた場合である。つまり、過去完了形は、現在完了形と過去形の両方に対応する。こうすれば一応の解決はつくが、場当たりのやり方という疑問は残る。

(11) 解決策 (2)

もうひとつの解決策は、2つのゾーンの図式で英語の時制の一致を説明するのをあきらめることである。フランス語では zone 2 の中核時制は半過去形で、時制の一致を起こさない。だからフランス語では zone 3 を設定する必要がない。一方、英語では zone 2 の中心には過去形があり、過去形は時制の一致を起こす。そもそも中核時制のあり方がフランス語と英語とでは異なっているのだから、フランス語と同じように英語を説明しようとすることに無理がある。この場合、取り得る解決策は Declerck のように、過去形は絶対時制でも

あり相対時制でもあるという考え方で押し切ることである。もしそうだとするならば、相対時制という概念が英語ではフランス語よりも重要な役割を果たしていることになる。

すると主節が過去時制のとき、従属節中の過去形と過去完了形は次のことを表す。

i) 過去形は同時性を表す

I knew that John *hated* me.

私はジョンが私を嫌っていることを知っていた。

ii) 過去完了形は先行性を表す

I knew that John *had hated* me.

私はジョンが私を嫌っていたことがある / ずっと嫌っていることを知っていた。

iii) 過去未来形は後行性を表す

I knew that John *would hate* me.

私はジョンが私のことを嫌いになるだろうとわかっていた。

(12) 残る疑問

状態動詞の場合、英語とフランス語とでは同じようになると考えてきたが、時制の一致に関しては異なる振る舞いをする。これはうまく説明することができない。

a. 英語の **was** は時制の一致を起こす

John is no longer the little boy he *was* ten years ago.

ジョンはもう 10 年前の少年ではない。

→ John was no longer the little boy he *had been* ten years before.

ジョンはもう 10 年前の少年ではなかった。

b. フランス語の半過去 **était** は時制の一致を起こさない

Jean n'est plus le petit garçon qu'il *était* il y a dix ans.

ジャンはもう 10 年前の少年ではない。

→ Jean n'était plus le petit garçon qu'il *était* dix ans auparavant.

ジャンはもう 10 年前の少年ではなかった。

(13) was の時制が一致するかどうかを Internet で検索すると次のような例が見つかる。

i) He didn't see it before but even though Sora was **no longer the little boy he was** when their journey had first started, he was still Sora.

彼はそんなことを見たことがなかった。しかしソラが二人の旅が始まった頃の少年ではないとしても、ソラはあいかわらずソラだった。[時制の一致なし]

ii) Hunter barely noticed when it stopped, but as it did, Hunter, **no longer the little boy he was** only minutes before, opened his tightly shut, earthen brown eyes.

ハンターはそれが停止したときほとんど気づかなかった。しかしそれが起きた時、5 分前の少年ではもうなかったハンターは、固く閉じた土色の目を開いた。[時制の一致なし]

iii) He was **no longer the little boy he had been**, but now a fine young man. "Cake is ready!" the cheery voice of Hope's friend Vanilla chirped.

彼はもう昔の少年ではなく立派な若者だった。「ケーキができたわよ」とホープの友達のバ

ニラの楽しげな声が響いた。[時制の一致あり]

- iv) Masaru was **no longer the little boy he had been**, and Jiro was no longer the confused android.

マサルはもう昔のような少年ではなく、ジロウも混乱したアンドロイドではなかった。

[時制の一致あり]

- v) He had grown in the years that had passed: he was **no longer the little boy he had been**, but was now taller than Arwen, Roydon, or Leyenda

彼はその後の数年の間に成長した。これはもう昔の少年ではなかった。アーウェンやロイドンやレヤンダよりも背が高かった。[時制の一致あり]

【疑問】 これまでは英語でも **be** 動詞のような状態動詞の過去形 (**was**) は、フランス語の半過去形 (*était*) と同じように未完了時制だと考えてきたが、これにも疑問が生じる。従来から、フランス語の半過去 (*Jean faisait du café*. 「ジャンはコーヒーを淹れていた」) と英語の過去進行形 (*John was making coffee.*) は同じものではないという指摘があったが、その線で考え直したほうがよいかもしれない。これは今後の課題とする。

9. 未来を表す過去形

英語やフランス語では次の例のように、従属節・補文において未来に起きる出来事が過去形で表される事例が観察される。

- (1) a. [If you shoot him] I will tell the police that you *murdered* him.

[もし君が彼を撃ったら] 君が彼を殺したと警察に言うよ。

- b. After the interview they will check whether what you *told* them (at the interview) was true.

インタビューの後で、彼らは君が (インタビューで) 彼らに話したことを確認するだろう。

- (2) a. I have to go or he'll be asking what *kept* me.

もう行かなくては。さもないと私がどうしてぐずぐずしていたか彼がいぶかしく思うだろう。

- b. I can't go to the concert tonight. You'll have to tell me tomorrow how it *was*.

今夜のコンサートには行けません。コンサートの様子を明日私に教えてくださいね。

- c. John will announce at midnight that he *burned* the document.

ジョンは深夜に文書を焼却したと発表するだろう。

(Cutrer, Michelle, *Time and Tense in Narrative and in Everyday Language*, Ph. D. thesis, Univ. of California, San Diego, 1994)

- (3) [勉強ばかりしている子供に母親が]

Va jouer dehors. Je ne dirai pas à papa que tu *trainais*.

(Go to play outside. I will not tell daddy that you *were* idling.)

外に遊びに行きなさい。パパにはお前が怠けていたなんて言わないから。

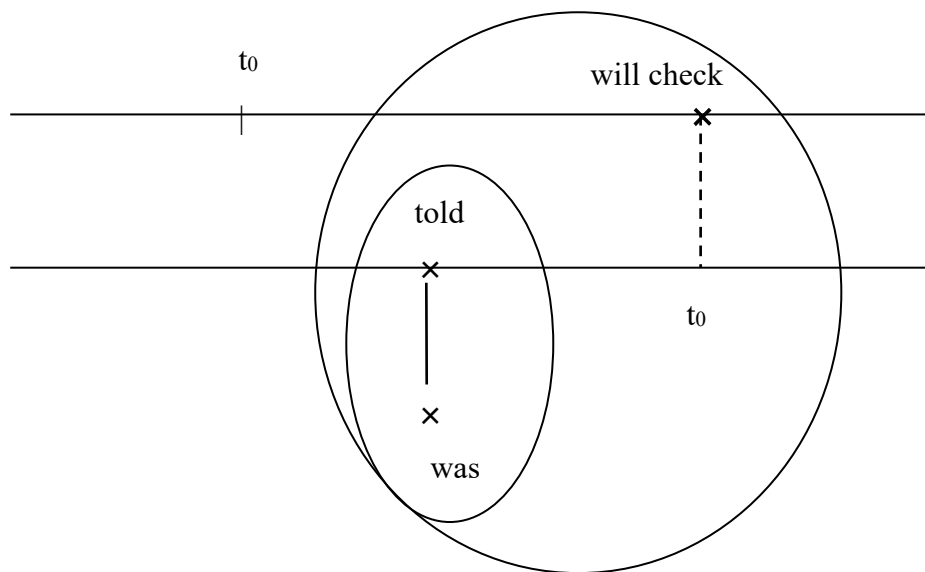
問題はこのような例に現れる過去時制が、どうして未来に起きる出来事に用いられるのかという点にある。それと同時に、この過去形は本当に過去を表しているのか、もしそうだとすれば何に対して過去を表すのかが問題になる。また Declerck の理論では、この過去形は絶対時制なのか相対時制なのかも問われなくてはならない。

(4) T-relations in a post-present domain are expressed by tenses resulting from a shift of perspective. The speaker treats the post-present central orientation time as if it were t_0 and uses a 'pseudo-absolute' tense form to T-relate another situation time to this 'pseudo- t_0 ', thus locating it in any of the four possible 'pseudo-absolute zones'. The pseudo-absolute tenses are the same as are used to express T-anteriority, T-simultaneity or T-posteriority to the real t_0 , namely the absolute past tense or the present perfect, the present tense and the future tense, respectively. Thus, in *Who will look after you when Brad and Sybil have left?*, the present perfect form *have left* expresses T-anteriority to the post-present pseudo- t_0 . (Declerck 2006 : 488)

現在後時領域 (=未来領域) における時間関係は、視点移動を起こした結果得られる時制によって表される。話し手は現在後時領域の中心的時点を、あたかも発話時現在 t_0 のように見なして、「擬似絶対時制」を用いて、他の状況とこの擬似 t_0 との時間関係を表現する。他の状況はしたがって 4 つの「擬似絶対時制領域」のいずれかに位置づけられることになる。擬似絶対時制は本当の t_0 との先行性、同時性、後行性を表すのに用いられる時制と同じものである。つまり絶対時制の過去形、現在完了形、現在形、未来形である。たとえば、*Who will look after you when Brad and Sybil have left?* 「ブラッドとシビルが去った後に、いったい誰が君の面倒を見るんだい」では、現在完了形の *have left* は擬似的発話時現在 t_0 にたいする先行性を表している。(Declerck 2006)

After the interview they will check whether what you *told* them (at the interview) was true.

インタビューの後で、彼らは君が (インタビューで) 彼らに話したことを確認するだろう。



【解説】

まず t_0 から見て現在後時領域を表す未来形の *will check* が定位される時点が、下の時間軸に投影されて、擬似的発話時現在 t_0' になる。*will check* は絶対時制であり、支配領域 (一番大きな円) を定める。次に *told* が t_0' より過去方向に定位される。この過去形は t_0' を基準とする絶対時制としての用法である。*told* は絶対時制なので、独自の支配領域を持つ (大きな円の中の小さな楕円)。*was* はこの支配を受ける相対時制で、*told* との同時性を表す。

(5) Declerck の図式には次のような疑問がある。

(A) 上の図では時間軸が 2 本描かれている。過去時制を問題にするときには、時間軸は 1 本だけであった。未来でなぜ時間軸が 2 本になるのかが説明されていない。

(B) 未来の時点が擬似的発話時現在 t_0' として働くのは未来方向への視点移動なのか。

(6) Cutrer (1994) の間接話法の分析

Special properties of speech spaces

The initial speech space has an inherent strong V-POINT role associated with an experiencer (Sells 1987). This V-POINT role, labeled here as @, is filled by the speaker or experiencer of the reported speech event. (Cutrer 1994 : 333)

話法スペースの持つ特殊な性質

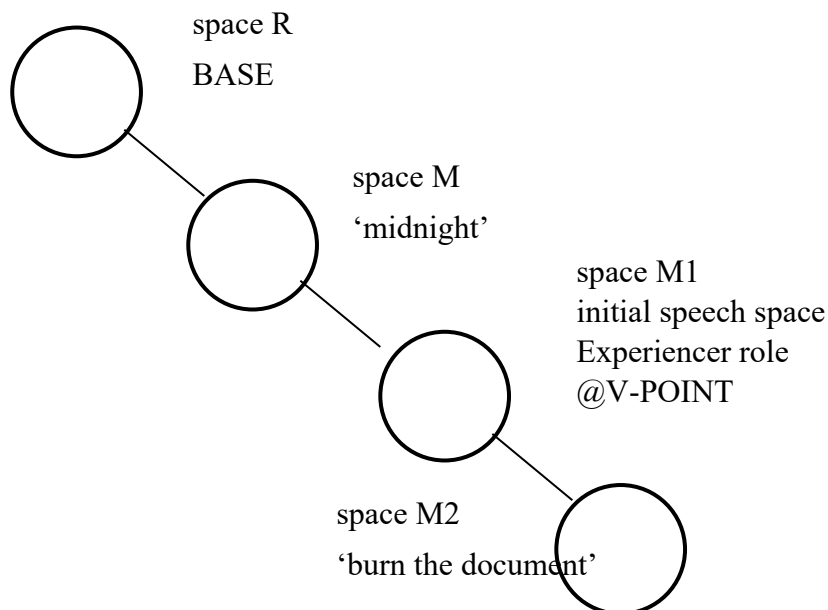
始発の発話スペースは、固有の強力な V-POINT の役割を持ち、この役割は経験者格と結びついている (Sells 1987)。この V-POINT 役割をここでは@で表示するが、@は間接話法の話し手または経験者によって担われる。

cf. Sells, Peter 1987 “Aspects of Logophoricity”, *Linguistic Inquiry* 18:3, 445-479.

(6.19) John will announce at midnight that he *burned* the document 2 hours before / ago at 10.

In (6.19), the expression “he burned the document” is interpreted as future in relation to “now”, and as prior only to the time of the announcement at midnight. The space targeted by the PAST event BURN is accessed directly from V-POINT@.

(6.19)では “he burned the document” という表現は、「今」との関係では未来のことと解釈される。そして、深夜の発表の時点から見て過去であるにすぎない。BURN という過去の出来事は、V-POINT@ から直接アクセスされる。



(7) ...there are cases in which the distinction between the two systems [= Absolute Future System and Pseudo- t_0 -system] is very important, viz. when there is some compelling reason for the subclause and the head clause to be interpreted in terms of the same intensional domain. If there is such requirement, the Absolute Future System is predictably ruled out from the subclause. There are at least two types of subclause in which this is the case.

(a) The first type consists of object clauses depending on an intensional (=world-creating) verb such as a verb of saying or thinking, in other words clauses forming part of a stretch of represented speech or thought. In represented speech or thought, the object clause has to be interpreted opaquely, which means that the contents of the reported clause must be interpreted as belonging to the intensional domain created by the intensional (reporting) verb in the head clause. Since an

intensional domain functions as a temporal domain, it follows that these object clauses must use the Pseudo- t_0 -system. The head clause uses the Absolute Future System.

[I can't give you my umbrella] My wife will wonder what I {have done / *will have done } with it. (Declerck 2006:542)

2つのシステム (絶対未来システムと疑似 t_0 システム)のちがいがとても重要になる場合がある。すなわちそれは、従属節と主節が同じ内包的領域という概念を用いて解釈されねばならない十分な理由があるときである。もしこのような要請があれば、従属節において絶対未来システムを用いることはできない。このようなケースが少なくともふたつある。

(a) 第一のケースは、発言動詞や思考動詞のような内包的動詞 (世界創造動詞) に依存している従属節である。言い換えれば描出された発言や思考を表す目的節である。描出話法においては、目的節は不透明な解釈を受ける必要がある。目的節の内容は、主節の内包動詞が作り出した内包的領域に属するとみなさなくてはならない。内包的領域は時間的領域として働くため、主節が絶対未来システムを用いているならば、目的節は疑似 t_0 システムを用いなくてはならないことになる。

[私の傘を君に貸すことはできない] 私が傘をどうしたのか妻が不思議に思うだろう。

【解説と考察】

内包的文脈は次のような命題態度動詞 *propositional attitude verb* の目的節が代表格である。

i) John believes that the man with a bow-tie is a spy.

蝶ネクタイの男はスパイだとジョンは信じている。

内包的文脈は不透明な文脈とも呼ばれる。このような文脈では、事象解釈 **de re** と言表解釈 **de dicto** のふたつの解釈が生じる。

事象解釈 : John は the man with a bow-tie と実際に言ったわけではなく、例えば the man with a brown hat と言ったかもしれない。

言表解釈 : John は実際に the man with a bow-tie と言っている場合

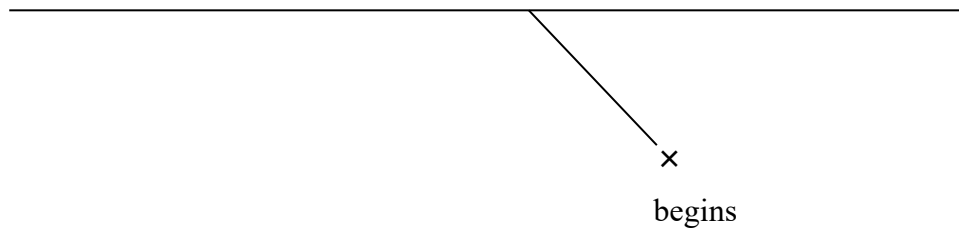
ここで扱っている例では、未来に視点移動が起きているように見える。しかし、これは過去方向の視点移動とは本質的に異なる操作である。過去への視点移動は t_0 と同じ時間軸で起きる。しかし未来を表す過去形の場合は、say, wonder, think のような内包動詞がもうひとつの世界 (R とは別のスペース) を作り出すため、未来形の表す時点を疑似 t_0 とするもう一本の時間軸が生まれる。未来を表す過去形はこうして生まれた時間軸の上で疑似 t_0 にたいしての「過去」を表しているにすぎない。

(8) 未来完了形とのちがい

Bill will have come back before the conference begins.

講演会が始まるまでにビルは戻って来ているだろう。

未来完了形では話し手の視点は発話時現在 t_0 に置かれており、上の場合のような擬似的発話時現在は形成されていない。未来完了の基準となる before the conference begins が表す出来事 e_2 は、他の出来事を定位する「基準点」であり、視点ではない。



- (9) *After the interview they will check whether what you *will tell* them (at the interview) *will be* true.

インタビューの後で、彼らは君が（インタビューで）彼らに話すであろうことが事実かどうかを確認するだろう。

you told → you will tell, was true → will be true のように、whether 節の過去時制を未来時制に書き換えると、they will check whether...が形成する擬似的発話時現在 t_0' に視点が移動し、それが発話時現在として振舞うため、you will tell, will be true の未来時制は t_0' 以後に起きる出来事を表し、結果的に意味が矛盾する文になってしまう。

- (10) フランス語で未来に起きる出来事が従属節で過去形によって表されることは、二つの zone 理論で次のように説明することができる。

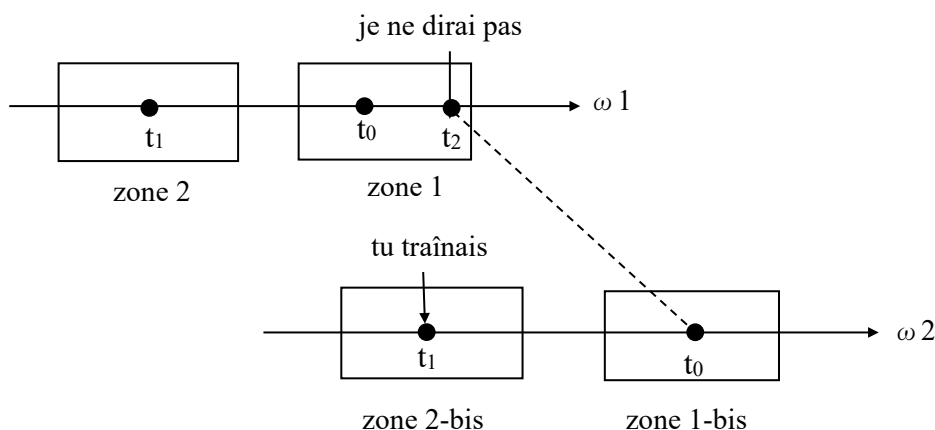
[勉強ばかりしている子供に母親が]

Va jouer dehors. Je ne dirai pas à papa que tu *traînais*.

(Go to play outside. I will not tell daddy that you *were* idling.)

外に遊びに行きなさい。パパにはお前が怠けていたなんて言わないから。

N.B. tu *taînais* は半過去形。



zone 1 は je「私」の発話時 t_0 を中心とする現在のゾーン、zone 2 は過去のゾーンである。未来は独立のゾーンを作らないので、je ne dirai pas (=I will not tell) の未来形は zone 1 で t_0 より未来にある t_2 に位置づけられる。間接話法では時間軸の多重設定が必要である。この考え方に立つと、図の点線が示すように t_2 を新たな t_0 として投射し、もう一本の時間軸 $\omega 2$ が形成される。半過去 *tu traînais* (=you were idling) はこうして作られた $\omega 2$ における過去ゾーン zone 2-bis に位置づけられる。言い換えると間接話法の伝達者は想像上で未来に

視点を移動し、そこから振り返った過去を表しているのである。

(11) なぜ時制の一致は過去方向にしか起きず、未来方向には起きないのだろうか。

a. Bill thought, “Sue is sick”.

「スーは病気だ」とビルは考えた。

→ Bill thought that Sue was sick.

スーは病気だとビルは考えた。[is→was の一致あり]

b. [If Sue behaves like that at the party] Bill will think, “Sue is sick”.

[もしスーがパーティーでそんな風に振る舞ったら]「スーは病気だ」とビルは考えるだろう。

→ Bill will think that Sue { is / *will be } sick.

ビルはスーが病気だ / *病気になるだろうと考えるだろう。[is→will be の一致なし]

a. で現在形 is が過去形 was に変わるのは、zone 1 から zone 2 へと時制システムの切り替えが起きるからである。b. で間接話法内の時制が変化しないのは、zone 1 の右側（未来方向）には新たな zone がないためである。主節の will think によって新たな時間軸 $\omega 2$ に擬似的発話時現在 t_0' が設定され、それを中心として zone 1-bis が形成されるので、結果的に zone 1 と同じ時制が用いられることになる。このために未来方向に時制の一致がないのだと説明することができる。

10. 現代日本語の時制

10.1. 現代日本語のテンス・アスペクト

(1) a. 太郎はテレビを見る。(非過去形、ル形)

b. 太郎はテレビを見た。(過去形、タ形)

c. 太郎はテレビを見ている。(非過去形・継続相、テイル形)

d. 太郎はテレビを見ていた。(過去形・継続相、テイタ形)

(2) 日本語の動詞分類

a. 状態動詞：ある、いる、値する、できる（可能）、etc.

b. 継続動詞：読む、書く、笑う、降る、etc.

c. 瞬間動詞：死ぬ、着く、点く、消える、etc.

d. 第四種の動詞：似る、そびえる、馬鹿げる、ありふれる、etc.

(金田一春彦「国語動詞の一分類」『言語研究』15, 1950)

(3) 動詞分類によってテイル形の可否と意味は次のようになる。

a. 状態動詞：テイル形不可

*あっている、*いている、*値している

b. 継続動詞：テイル形は動作の継続を表す

太郎は本を読んでいる、雨が降っている

c. 瞬間動詞：テイル形は結果状態を表す

この人はもう死んでいる、列車は目的地に着いている

d. 第四種の動詞：テイル形でしか用いられない

そんなこと馬鹿げている、とてもありふれている

ただし、従属節では第四種の動詞がテイル形以外で用いられることもある。

- i) 養子なのに息子が養父に似るなどということがあるだろうか。
- ii) 正面にそびえる山はチョモランマです。

(4) テイル形には次のような意味がある。

- a. 継続動詞では動作の継続を表す
泣いたカラスがもう笑っている。
- b. 瞬間動詞では結果状態を表す
窓が開いている。
この仮説はもう証明されている。
- c. 過去の経験・経歴を表す
彼はエベレストに 3 回登頂している。
- d. 習慣・反復を表す
太郎は朝食前に近所を散歩することにしている。
父は最近よく京都に行っている。

(5) また過去形のタ形には、過去を表さない用法もある。

- a. 母によく似た人
- b. 尖った鉛筆
- c. 曲がりくねった道
- d. 開いたドア
- e. 錆びたナイフ
- f. あきれた話
- g. この酒はとても飲めたものではない。

10.2. 井上 (2001)

井上優「現代日本語の『タ』」、つくば言語文化フォーラム編『「た」の言語学』ひつじ書房、2001

(1) 問題 1

- a. モーツアルトは 1788 年の夏に三つの交響曲を作曲した。
- b. モーツアルトは 1788 年の夏に三つの交響曲を作曲している。
→ 過去の出来事を述べるのに 2 つの形式があるのはなぜか。

(2) 問題 2

- a. [昨日はレポートの提出日であった]
甲：昨日、レポート出した？
乙：うん、(ちゃんと昨日) 出したよ。
いや、(昨日は結局) 出さなかった。
- b. [甲と乙はレポートの提出期限を翌日にひかえている]
甲：(もう) レポート出した？
乙：うん、(もう) 出したよ。

いや、(まだ) 出していない。

→「シタ」に 2 つのタイプがあるということはどういうことか。

(3) 問題 3

- a. [探していた本がカバンの中にある (入っている) のを見つけて]

あっ、ここにあった (入ってた) [発見]

- b. [「今日は給料日である」ことを思い出して]

そういえば、今日は給料日だったなあ。[思い出し]

→「タ」が発見や思い出しというムード的な意味を表すのはどうしてか

(4) 考察の方向性

- a. 主文末の「タ」が表すのは「発話時以前の出来事・状態である」というテンス的な意味のみであり、「発話時までには実現済み」という現在完了的な意味、及び「発見」「思い出し」といったムード的な意味は、「タ」の基本的意味とは別のレベルで生ずる。

- b. 経験・記録用法の「シテイル」と「(モウ) シタ」とでは、過去の出来事を現在と関連づける様式が異なる。

10.2.1. 問題 1 について

- (1) まず、記録用法の「シテイル」は、当該の出来事を「現存する記録や痕跡を介してのみ把握可能な出来事」として述べる表現である。つまり、「現存する記録や痕跡では出来事 p が実現されたことになっているが、出来事 p が実現された時の経過は把握できていない」という場合、「シタ」は使えず、そのかわりに「シテイル」が用いられるということである。

(井上 2001 : 111)

- (2) a. 種は昭和二十四年七月に霧積で八尾出身の人物 X に会っています。

- b. 種は昭和二十四年七月に霧積で八尾出身の人物 X に会いました。

「会いました」を用いると、

- i) 種が人物 X に会った時のことを直接知っている人物が述べている

- ii) 種の一連の行動について調査した捜査員が、その一連の行動を再現する中で X に会ったことに言及した

というように、「種が人物 X に会う」という出来事が実現された経過を話し手が把握しているというニュアンスの文になる。

(Ibid.)

- (3) 甲：乙さん、この間『「た」の言語学』を注文されましたね。

乙：え？ そんな本注文したっけ？

甲：[注文のハガキを見せて] これ、乙さんの字ですよ。

乙：本当だ。確かに先月注文してる (??注文した) ねえ。

あ、そういえば、何かそんなタイトルの本注文したなあ。

(Ibid.)

- (4) a. [お湯が沸くのを今か今かと待っていたところ、目の前でお湯が沸騰状態に達した]

よし、湧いた。/ ??よし、沸いてる。

- b. [コンロにかけておいたお湯がいつのまにか沸騰状態にある（沸騰した瞬間は見えない）]

お、沸いた。 / お、沸いてる。

- c. [給湯室の前を通ったら、誰が沸かしたかはわからないが、やかんの中のお湯が沸騰状態にある]

あれ、お湯が沸いてる。 / ?? あれ、お湯が沸いた。

「シタ」を用いるためには、出来事が実現された経過（少なくともその一端）を具体的な形で把握していなければならない。 (Ibid.)

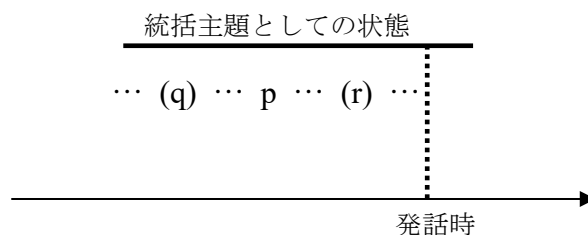
- (5) [記録用法の「シテイル」は「シタ」に置き換えることができない (cf. (3) (4 c))。しかし、過去用法の「シテイル」は「シタ」に置き換えることができる (cf. (1 a, b))。]

この場合、出来事が実現された時の経緯が把握できているにもかかわらず「シテイル」が用いられるわけであるが、この背景には、

過去の出来事を「現在も有効なある状態に従属する一場面」としてとらえる。

ということがあると見られる。つまり、過去の用法の「p シテイル」とは、「出来事 p の背景にある“統括主題”としての状態は現在も有効である」（過去から現在にいたるまで、ある統括主題のもとで類似の出来事が起こっている）ということを暗示しつつ、出来事 p をその統括主題に従属する出来事の一事例として述べる表現である。 (Ibid.)

「p シテイル」



- (6) a. 現代を代表する作曲家の一人である武満徹氏がさる 2 月 20 日になくなりました (?? なくなっています)。今日はまず、氏の代表作の一つである「弦楽のためのレクイエム」を小澤征爾の指揮、トロント交響楽団の演奏でお聞きいただきたいと思います。

- b. このところ世界各国で著名人が相次いでなくなっていますが、日本では、現代を代表する作曲家の一人である武満徹氏がさる 2 月 20 日になくなっています。

- (7) しばしば指摘される「シテイル」の経歴的なニュアンスも、当該の出来事を「当該の人物や事物に関連して、過去から現在にいたるまで様々な出来事が起こっている」という統括主題に従属する事例として述べることから生ずる。 (Ibid.)

- (8) 今日はクルト・ゲーデルという数学者の話をします。

ゲーデルは 1906 年に現在のチェコ共和国のモラビア地方に生まれました。(略) 1940 年にアメリカに亡命し、1978 年にプリンストンでなくなっています。

さて、ゲーデルはその生涯において三つの重要な定理を証明しております。その一つが有名な「不完全性定理」です。不完全性定理については、最近 A 氏が一般向けの解説書を書いておられますが… (Ibid.)

- (8) まず、発見の「…タ」とはいえませんが、本質的に同じメカニズムにささえられている

と見られる「…タ」の使い方について述べる。

(100) (今日太郎からもらった CD を聞きながら、日記を書いている)

今日太郎から CD をもらった。ベートーヴェンの「第九」だった。今聞いているが。
なかなかいい演奏だ。

(101) (今日買った CD を聞きながら、日記を書いている)

今日 CD を買った。ベートーヴェンの「第九」だ (??だった)。今聞いているが。な
かなかいい演奏だ。

「だった」を用いた(100)は、次に示すように、「(見たら) …だった」という意味の文である。

(102) 今日太郎から CD をもらった。(見たら) ベートーヴェンの「第九」だった。今聞
いているが。なかなかいい演奏だ。 (Ibid.)

(9) この例にかぎらず、発話時において存在することが明らかな状態 p に対して、過去形を用いて「発話時以前に状態 p が存在した」ということを述べた場合は、発話時以前のある時点で観察された状態 p を、発話時における同一の状態 p から切り離して独立に叙述する（前景化させる）ことになる。そして、その結果、発話時以前に「観察行為 — 状態の判明」というプロセスが存在したことが暗示される。 (Ibid.)

(10) 以上、発見の「…タ」とはいえないが、本質的に同じメカニズムにささえられていると見られる「…タ」の用法について見てきたわけだが、筆者の見るところでは、いわゆる発見の「…タ」も、「発話時以前の観察時の状態だけを独立に叙述して、発話時以前に観察行為があったことを暗示する」ということの延長線上に位置づけられるものである。

(114) (探していた本がカバンの中にある (入っている) のを見つけて)

あ、ここにあった (入ってた)。

(115) (北京市の地図を見ながら)

えーと、友誼賓館はと…。あった、あった。

この場合、「本 (友誼賓館) がどこにあるか調べる」という観察行為が発話時直前まであったことと呼応する形で「あった」が用いられている。発見の「…タ」においては、発話時直前に観察された状態 p を、眼前に存在する同一の状態 p から切り離して独立に叙述することにより、発話時以前に観察行為がなされていたことが暗示されるのである。 (Ibid.)

(11) 井上 (2001) への疑問 (その 1)

井上の分析は次の要約にまとめることができる。

i) 経験・記録用法の「シテイル」

過去の出来事を、発話時において有効なある統括主題（複数の類似の出来事の背景にある一つの状態）に従属する一事例として述べる。

ii) 「シタ」

実現の経過（少なくともその一端）が把握できている過去の出来事を、特定の統括主題に従属しない独立の出来事として述べる。

この分析には次のような疑問を抱くことができる。

【疑問 A】

「シテイル」には非過去・継続相の「太郎は TV を見ている」と並んで、結果状態を表す完了（パーフェクト）相の「太郎は宿題を済ませている」がある。経験・記録用法では、過去の出来事を述べているのに、なぜ発話時における結果状態を表す形式が用いられるのだろうか。

【疑問 B】

実現の経過（少なくともその一端）が把握できていないと「シタ」を用いることができないのはなぜだろうか。

(12) 井上 (2001) への疑問 (その 2)

「発見のタ」について井上は、「発話時直前の状態 p を、今の同一の状態 p から切り離して独立に叙述することで発話時以前に観察行為があったことが暗示される」と述べている。何かを探していて「あった」と言う場合は、確かに発話より前に探す行為がある。しかし「ムードのタ」はそのような場合に限らない。

i) [少し離れた所にいる人の名前が思い出せなくて]

えーと、あの人の名前は何でしたっけ。

ii) [カレンダーを見て気がついて]

しまった。明日は妻の誕生日だった。何も準備していないよ。

この例では発話以前に観察行為があったとは思えない。これはどう説明できるか。

(13) 疑問その 1 の A について

井上は次のように述べている (井上 2001 : 123)

経験・記録用法の「シテイル」を含め、パーフェクト形式としての「シテイル」が有するパーフェクト性は、つまるところ「当該の出来事を、設定時において有効な統括主題としての状態に従属する一事例として述べる」という形で一般化できる。

また Declerck は次のように述べている。

The present perfect locates a situation in the pre-present sector of the present time-sphere. This means that the speaker using this tense is concerned with **the structure of the world at TU** (=time of utterance) rather than with the past situation itself: using the present perfect, the speaker is thinking of NOW, not of THEN. (ボールド体の強調は引用者による)

(Declerck, R., *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, 1991, Kaitakusha, p.97)

現在完了は、ある場面を、現在時領域の一部である現在前時領域に位置づける。これは、現在完了を用いた場合、話し手の関心が、過去の場面そのものよりも、発話時における世界の構造のほうにあるということを意味する。現在完了が用いられているなら、話し手は、「あのとき」(THEN)ではなく、「いま」(NOW)のことを考えているということができる。(下線は引用者による)

「シテイル」も英語の現在完了形も、「発話時における世界の構造」、つまり、発話時 to における静的状態 (state of affairs)を表している。「シテイル」が、「太郎は本を読んでいる」では継続を、「ドアは開いている」では結果状態を表すが、それは動詞の内的アスペクトが反映されているにすぎない。

井上の言う統括主題は発話時において関与的な主題であり、過去の出来事がその一事例として述べられるとき、それは出来事性を失って状態化されると考えられる。

(14) We may note that one may describe the world in either of two ways: by describing what things happen in the world, or by describing how the world is made that such things may happen in it. (...) This knowledge of the “structure of the world” relates to particular events in many and various ways. (...) So for example, we may say (2) on the basis of having designed the car this way.

(2) This car runs on kerosene.

(...) This knowledge of the structure of the world contrasts with a “phenomenal” description of the world. Consider (3).

(3) *Guys and Dolls* is playing at the Roxy.

A sentence like (3) simply describes what is happening, what we might see if we simply opened our eyes.

Or consider the pair of sentences (4) and (5).

(4) The engine isn't smoking anymore.

(5) The engine doesn't smoke anymore.

Our semantic analysis of this pair of sentences is that (4) describes a situation phenomenally (progressive aspect), and (5) structurally. (...) To say *The engine doesn't smoke anymore*, you would certainly have to start the engine first, and your comment would be just an observation, rather than a claim about its being repaired, as (5) is.

(Goldsmith, John & Erich Woisetschlaeger “The logic of the English progressive”, *Linguistic Inquiry* 13-1, 1982)

私たちが世界を記述するとき、二つのやり方があることに留意しよう。この世界でどのようなことが起きているかを記述するやり方と、そんなことが起きるなら世界はどのようにできているかを記述するやり方である。(…) この「世界の構造」についての知識は、特定の出来事にさまざまなかたちで関係している。(…) たとえば、ある車を設計したという事実に基づいて、(2)のように言うことができる。

(2) この車はケロシンで走る。

(…) 世界の構造についての知識と対照的なのが、世界を「現象的」に見るやり方である。(3)を見られたい。

(3) 「ガイズ・アンド・ドールズ」をロキシー座で上演している。

(3)のような文は単に起きていることを述べている。目を開けさえすれば見えることである。

(4)と(5)の対比を見てみよう。

(4) エンジンからはもう煙はでない。

(5) エンジンからはもう煙は出ていない。

我々の意味的分析によれば、(4)は状況を現象的に記述し（進行相）、(5)は構造的に記述しているのである。(…)「エンジンからはもう煙は出ていない」と言うためには、まずエンジンを始動させなくてはならず、この発言は単なる観察を述べたものにすぎず、(5)のように修理が完了したという事実を述べたものではない。

疑問その1 (A) にたいして次のような答を与えることができる。

過去の出来事を述べるのに、発話時現在における結果状態を表す「シテイル」を用いるのは、話し手の関心が過去の出来事そのものではなく、過去の出来事の結果とし

て生じた現在の世界の構造 (structure of the world) にあるためである。このとき、現象的見方 (phenomenal) から構造的見方 (structural) への転換にともない、出来事 (event) から状態 (state) へと事態情報が変換される。

10.3. 定延 (2004)、定延 (2008)

[1] 定延利之「ムードの『タ』の過去性」『国際文化研究』21 (神戸大学国際文化学科 紀要)、2004.

[2] 定延利之『煩惱の文法 体験を語りたがる人びとの欲望が日本語の文法システムをゆさぶる話』ちくま新書、2008.

(1) 問題設定

次のような「ムードのタ」については、発話時現在に成り立つ状態 p について過去形のタを用いるのはなぜかという点が問われてきた。

- a. [財布を探していて] こんなところにあった。
- b. [待ち人が柱の蔭にいるのを見つけて] なんだ、そこにいたのですか。
- c. あの人の名前何だったっけ。

このタはモダリティを表し過去ではないとする見方に反対し、このタは過去を表すと定延は主張している。

(2) [タイムマシンで 600 年前の世界に行ってピサの斜塔に住もうと相談している]

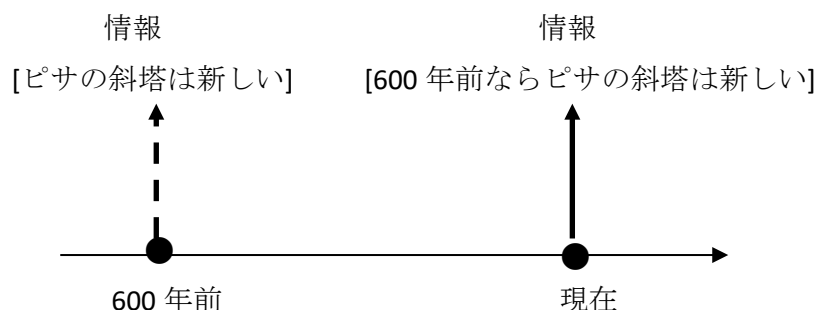
- a. そりゃいいや！ 600 年前ならピサの斜塔も新しいからね。
- b. ?そりゃいいや！ 600 年前ならピサの斜塔も新しかったからね。

(3) 兄：タイムマシンで 10 年前の世界に行って、おばあちゃんと遊ぼうよ。

弟：そりゃいいや！ 10 年前ならおばあちゃんも元気だったからね。

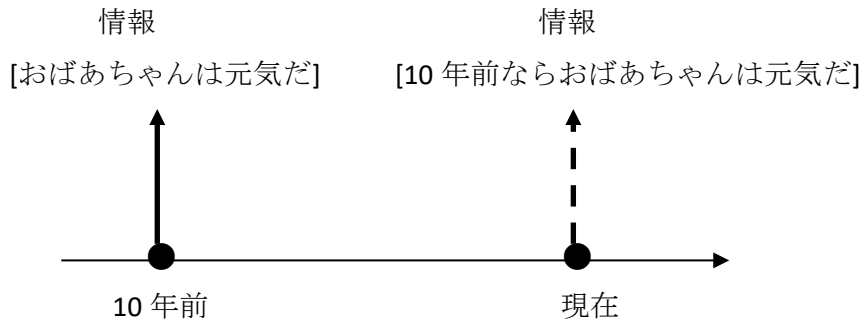
(4) 情報のアクセスポイント

何らかの情報を言語で表現するときには、話し手はその情報を脳裏に浮かべる必要があり、そのために話し手は心内でその情報にアクセスしなくてはならないとする。アクセスするときの時間軸上のよりどころを「情報のアクセスポイント」と呼ぶ。



図は定延 (2008)

情報 P = 「600 年前ならピサの斜塔は新しい」は、過去の事物に関する情報であり、また歴史的事実として現在も成り立つ情報である。このため P は二つのアクセスポイントを持つ。現在をアクセスポイントにすれば、「600 年前ならピサの斜塔は新しい」となり、過去をアクセスポイントに選べば「600 年前ならピサの斜塔は新しかった」となる。後者が不自然なのは、情報 P は過去にさかのぼって体験的に取得できる情報ではないからである。



「10 年前ならおばあちゃんは元気だった」が自然なのは、情報 P が過去にさかのぼって体験的に取得できるからである。

(5) 情報のアクセスポイントという概念を用いて本稿で主張したいことは、「テンスの『た』にせよムードの『た』にせよ、『た』は情報のアクセスポイントが過去であることを示す」ということである。(定延 2004 : 10)

(6) [人類発の有人宇宙飛行をして地球に帰還したガガーリン少佐が記者会見で]

地球は青かった。(The earth was bluish.)

(7) 思い出しのタ

a. そうだ、思い出した。鯨は哺乳類だった。

b. しまった。明日は妻の誕生日だった。

思い出した時点 t_1 は発話時の直前である。 t_1 以前の過去の任意の時点をアクセスポイントとし、情報 P=「鯨は哺乳類である」が t_1 以前にも記憶に存在していたことをタが表している。

(8) 関連づけのタ

山田は 5 二歩を見た瞬間、「こんな手を読み落としていたか。バカな」とイヤ気がさし「そんなら 9 二竜ではなく 7 四竜だった」とくやみ…

(9) 正解のタ

[クイズ番組で司会者が] 正解は 3 番でした。

(10) 英語ではムードのタは不活発であるが、次のような場合に用いられる。

a. What was your name?

b. Oh, it WAS there.

(11) フランス語ではムードのタに半過去形が用いられる

a. [待っていた人を柱の蔭に発見して]

Ah, vous étiez là. (Oh, you were there.)

(何だ、そんな所にいたのですか。)

b. [人の名前をどうしても思い出せなくて]

Comment il s'appelait déjà ? (What was his name?)

(あの人の名前何だっけ。)

c. Zut ! Demain, c'était l'anniversaire de ma fille.

(Oh my God! Tomorrow was my daughter's birthday.)

(しまった。明日は娘の誕生日だった。)

d. [空港で飛行機を待ちながら]

Ton avion *partait* à 16h30. (Your airplane was to leave at 16:30.)

(君の乗る飛行機は 16 時 30 分発だったね。)

10.4. ムードのタと状態性

(12) いわゆる「ムードのタ」は状態性述語に限られる

- a. どこまで帰るんだったかね。
- b. どこまで帰ったかね。
- c. 君ビール飲んだね。[習慣]

(寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味 第2巻』くろしお出版、1984)

(13) 出来事的テンスと情動的テンス

本稿では、通常の意味での、事柄の世界における時間的な分布に依存するテンスの決まり方を「出来事的テンス」と呼ぶ。そして、それとは別に、当該の事柄を情報として捉え、その情報が話し手の時間的な経験とどのように関係を持つかということによって決まるテンスの機構があると考え。これを「情動的テンス」と呼ぶことにする。(…)

情報はいわば「もの」であり、時間の流れからは超然とした存在物である。情報が時間的な性格を帯びるとすれば、それは、話し手が事故の直接経験の中でその情報とどのように接したか（あるいは接しなかったか）というあり方を通してしかあり得ない。そのようなあり方に依存して決まるテンスが情動的テンスである。

どのような文であってもそれが表す内容はすべて情報としての性質を持っているが、日本語の場合、運動動詞文は一般に情動的テンスがとりにくいのに対し、静的述語文では容易に情動的テンスをとることができる。これは、特定の一時点において情報として把握できるというのが静的事態（状態性の事態）の特徴だからである。つまり、「ある一時点においてある状態が成立しているかいないか」という情報は、そのまま「ある情報がその時点で存在しているか存在していないか」という把握に容易に置き換えられるのである。

(金水敏「テンスと情報」科学研究費補助金研究成果報告書『統語情報と意味・談話構造を統合する言語モデルの研究』、2001。金水敏「テンスと情報」音声文法研究会編『音声と文法』3、くろしお出版に再録)

(14) なぜ運動動詞文は情動的テンスを取りにくいのか

その理由は、過去の時点 t_1 をアクセスポイントとして、一回のアクセスによって取得できる情報は状態性の事態に限られるからである。運動性の述語（とりわけ状態変化述語）による事態の成立を確認するには、「成立前の状態」と「成立後の状態」、場合によってはそれに加えて「成立途中の状態」にアクセスしなければならない。「ドアが開いた」と言うためには、「ドアが閉まっている状態」と「ドアが開いている状態」の両方が必要である。これには複数のアクセスポイントが必要となり、より複雑な認知的操作をしなくてはならない。運動動詞文が情動的テンスを取りにくいのはこのためである。

10.5. 井上 (2001) への疑問再考

【疑問 B】

実現の経過（少なくともその一端）が把握できていないと「シタ」を用いることができないのはなぜだろうか。

- (15)a. [お湯が沸くのを今か今かと待っていたところ、目の前でお湯が沸騰状態に達した]
よし、湧いた。/ ??よし、沸いてる。
- b. [コンロにかけておいたお湯がいつのまにか沸騰状態にある（沸騰した瞬間は見えていない）]
お、沸いた。/ お、沸いてる。
- c. [給湯室の前を通ったら、誰が沸かしたかはわからないが、やかんの中のお湯が沸騰状態にある]
あれ、お湯が沸いてる。/ ?? あれ、お湯が沸いた。

「シタ」を用いるためには、出来事が実現された経過（少なくともその一端）を具体的な形で把握していなければならない。(井上 2001)

【考察】

「湯が沸く」は運動述語であり、状態変化動詞である。すでに見たように状態変化動詞による事態の成立を確認するには、少なくとも「成立前の状態」（まだ湯は沸騰状態に達していない）と「成立後の状態」（すでに湯は沸騰状態にある）の両方が必要であり、アクセスポイントを二つ持たなくてはならない。

(15 a)では湯が沸くまでの過程を見ているので、複数のアクセスポイントを使うことができ「タ」が使える。(15 b)では沸騰の瞬間は見えていないが、やかんをコンロにかけた時と沸騰状態にある時の二つのアクセスポイントがあるため「タ」が使える。また沸騰に達するすぐ前の状態を見えていないので、「テイル」も使うことができる。(15 c)では沸騰状態にある時点しかアクセスポイントがないため「タ」を用いることができない。